



私は暗い路地を歩いていた。

足元の地面は一步踏み出す度に大きく揺れ動き、デリン燈の緑がかつた光もまた、嵐の海原を行く船の明かりのように見えた。

『銀の鶏』亭でデイコンを一瓶空けてしまったのはこの歳にして分別ある飲み方とは言えなかった。ただ、いつからか胸の中に空いている大きな空洞を埋めるためには、そのくらいの量の酒が必要だったのだ。世界放浪の旅は私に数えきれない驚異を見せてくれたが、その代償として私は何かを支払い過ぎてしまったのかも知れない。

大都サンジェリイに放浪の旅から帰還し、クーリカフ街に探偵局を開いてからもうかなりの歳月が過ぎ去っていた。私は様々な事件に首を突っ込んだ。その内の幾つかは解決したが、幾つかは私の力では太刀打ちできないものだった。大方の場合はその中間で、事は一応の解決を見たが、割り切れない何かを私の心中に残していた。

私にはその何かを捨てるのが容易には出来なかったが、虚空はその何かでは満たすことはできなかった。

だが、それでも私は何かを信じていたのかも知れなかった。得体の知れない、実体のない輝きのようなものを漠然と胸のうちで求め続けていたのかも知れない。

私は疲れていた。最後に依頼人が訪ねてきたのはもう一ヶ月も前のことだった。その男は娘の結婚相手の身元を調べて欲しいと言ってきたが、私は男の横柄な態度が我慢ならず（ライアノン通りで絹商人をやっている裕福な男だった）シエアを浴びせて追い返した。

まるで子供じみた馬鹿げた行為だった。だがとても正しい行為のよう

にも思えた。

私が歩いているのは、サンジェリイの悪行の温床として名高いトリプロ街からもほど近い、名もない通りだった。本当は何か名前がついているのかも知れないが、私は知らなかったし、酒神アルオリクの僕となった今の私には通りの名前など無意味だった。

行き交う人もなく、ただこんな小さな通りには珍しく、デリン燈の人工の明かりがぼつりぼつりと暗闇の中に浮かんでいた。

道の両側に立ち並ぶ家々はどこも錠戸を閉め、寝静まっている。自分のたてる不規則な靴音だけがざらざらした響きを伴って耳に届いた。雨がいつのまにか降り始め、私の緑色のくたびれた外套を濡らしていった。この通りを進んでいても、クーリカフ街の我が家には着きはしないことはぼんやりとわかっていたが、いずれにせよ誰が待つわけでもない家に帰りたいという気もあまり起こらなかった。

赤い飾り文字でスナブ・ランケン探偵局と書かれた扉を今はあまり見たくなかった。といって、行く宛てがあるわけでもなかった。

誰にも会いたくなかったが、誰かに会いたいような気もした。デイコンに浸された頭は矛盾だらけの考えを次から次へと産み出しては捨てていった。

足はますますもつれるようになり、デリン燈の青銅の柱は、音楽もないのにでたらめな踊りを始めて、一向に止める気配はなかった。

道の真ん中に寝そべったらとても気持ち良く眠れそうな気がした。雨で柔らかくなった土が優しく私の体を包んでくれるような気がした。

どの辺りに転がるうかとデリン燈の光の輪の中に立ち、自分のまわりを見回した。雨に打たれ小さな水たまりが出来つつある焦げ茶色の地面。荷車のものらしき轍が幾筋か見える。白つ茶けた灰色の石塀に雨が黒ずんだ模様をつくっていく。薄緑の光を浴びて光る雨粒。緑青の吹いた六角形の街灯の柱。その根本には誰かが捨てていったごみ屑が散らばって

いる。ばらばらに壊れた古い椅子、ひと束の紙屑、果物や野菜の腐りかけた屑。

ごみと街灯の間にうずくまっているものがあつた。

銀色の鱗を持った蛇のようにぬめぬめとした光沢を持つ、丸みを帯びたものが、デリン燈と石塀とごみに囲まれた狭い場所にはいり込んでいます。

私はよたよたとそのものに近づいていった。雨にうたれているそのぬめりとしたものはひどく煽情的に見え、私は急に股間のものがいきりたつてを感じた。

あと五歩ばかりのところまで近づいて私はその理由を了解した。未知の蛇や蜥蜴の類かとも思えたそれは人間の、女だった。

身にまとった薄い服が雨にうたれ、またデリン燈の光を浴びて独特の艶を持つていたのが酔った私の目には鱗持ちの肌のように見えたらしかった。あまり女性の衣装に詳しい方ではなかったが、値の張る生地であることはわかった。

女は身体を丸く縮めて地面に横たわっている。緑がかつた光の下で肌は異様な白さに見え、体にびったり張り着いた貫頭衣のような服とほとんど同じ色に見えた。棒切れのように細い手足をしており、足には何も履いていなかった。

白い身体の中で、うなじのあたりで切り揃えた髪だけが黒く、そこだけぼつかりと深い穴が開いているようにも見える。紙切れのように白い顔はまだ若く、少女と言つてもいい年のようだったが、閉じた目のまわりには深い隈があり、唇には色がなかった。

そこまで見て取ると私は突然疲労感に襲われ、その場に座り込み、そのまま仰向けにひっくり返った。視界の左の方でデリン燈がまぶしい光を発し、その下に女が転がっている。真上の真黒い夜空からは雨粒が幾らでも落ちてきた。

私は腕をついて身体を起こし、数メートル（一メートルは約三十センチ）向

こうに横たわる女を見つめた。よく見ると小刻みに体が震え、白っぽい唇が時々何事かささやくように動いている。私と同類の酔漢かとも思ったが、若い金のある女がひとりで飲み歩いたりはしないだろう。どちらかと言えば何か悪い薬にでも手を出しているようにも思えた。

いずれにしてもこのまま放っておくのはこの女のためにならないことだとは、酔った頭でも確かなことに思えた。

私はよろよろと立ち上がると、女の側に行くまでに二回しりもちをつき、街灯に頭をぶつけて額を切った。一筋の血が流れて唇に入り、その塩辛い味が少しばかり酔いを覚ましたような気がした。

ここでこの女を放って家に帰ることが出来れば、こんな馬鹿げた酔い方はしなくてすむようになるのかも知れないという思いが頭をよぎった。

だが、私は女の細い腰に腕を回し、体を引き起こした。意識のない人間の体ほど厄介な荷物はない。女は子供のように軽かったが、酔った私には重荷だった。

それから家に帰りつくまで何度転んだかは覚えてはいない。

目が覚めた。頭の中で誰かひどく意地の悪い奴が金槌を振り回していた。

私は仕事部屋兼客間のすりきれた赤い長椅子の上に寝ていた。雨に濡れたまま寝たせいか、体中べとついていてそれだけでも十分気分が悪かったが、デイコンはまだまた余力を残して腹の中を駆け回っており、私に出来るのは頭を抱えて無意味なうめき声を上げることだけだった。自分が豚の腸詰か何かにでもなったような気がした。

朝日が部屋の中にさしこみ、薄灰色の壁の染みや机の上に転がっているデイコンの空き瓶や床に落ちたままの紙切れや天井からぶら下がっている蠅の死骸といったくだらない物を照らし暖めていた。天気はよいらしく日差しは強くまぶしかった。

長椅子の肘掛けに手をかけ重い体を引きずり起こした。上半身が起き上がったところで吐き気が込み上げてきた。厠に行こうと立ち上がると頭から血の気が失せ、汗が吹き出した。

口許を手で押さえながら厠へ行き、胃の中の物を残らず吐き出した。口から昨日までは食べ物だった物が出て行く度に、額のあたりが割れるように痛んだ。

台所で口をゆすぎ、顔を洗った。そして昨夜の拾い物を思い出した。

寝室の戸を開けると、昨夜の女がまだ私の寝台に横たわっていた。私が紳士的にも掛けてやった毛布にくるまって体を丸めて女は寝入っていた。一瞬、死んでいるのではないかとも思えたが、ごくゆっくりとした寝息が微かに聞こえた。

朝日を浴びた女の顔は白い紙細工のように見えた。細面のきれいな顔だちだったが、沈んだ目の回りに荒廃の色が見えた。

私は壁にもたれて、腕を組んだ。余計な情心を出したばかりに厄介事を引つ張り込んでしまった。愚かな自分に腹を立ててみたがいまさらどうしようもなかった。ともかく今は酒を飲む気分にはなれない。だからこの女をどうにかしなければならなかった。

壁から体を離すとその拍子に、棚の上からガーステア族の木彫りの人形が床に落ちた。

女の目が開いた。目に見えない粘着質の糸のようなものがそこから発せられたように、私はその場に釘付けになった。女の半眼に開いた目に私は支配されていた。

明るい鶯色の、金色とも見える瞳だった。その目は真っ直ぐ私を見ているようだったが、また、どこも見ていないようにも思えた。

実際にはごく短い時間だったのだろうが、私は数刻もその目を見つめていたような気がした。呪縛は彼女の方から破られた。木の実のような瞳が大きく開き、乾いた唇が開いて、短い悲鳴が飛び出した。

だが、その瞳はどこか遠い彼方を見ていた。怖がっているようではなかった。この女には何も怖いものはないような気もした。さっきの悲鳴は単にこの世における一応の役割を演じてみせただけだったのかも知れない。

「あなたは昨日の夜トリプロ街の近くの通りで行き倒れてた。僕はいい加減酔っ払っていて、あなたを背負ってここまで帰ってきたってわけだ。あんまり道で寝るのはいい趣味ではないね、気持ちにはわかるが」

女は寝床の上に体を起こした。ひどく痩せている。黒い髪は短く切っているの、細い首がいつそう細長く見えた。

「どこで寝ようかあなたにそんな説教される云われはないわ」

女はゆっくりとまだ夢でも見ているような口調で言った。

「御説ごもつとも。余計なちよっかいを出した僕が悪かったね。ごみの中でくたばるのが君の願望だ。今夜、再挑戦してくれ」

そこまで言うともまた吐き気が込み上げてきて、私は口に手を当てた。

「そんなところで吐かないですよ。私、あなたの吐くところなんて見たくないわ」

感情のこもらない、上の空の台詞だったが、私は無性に腹が立った。寝台の側によると女の頬を張り飛ばした。

女は力なくのけ反り、倒れた。鼻からどす黒い血が流れ出した。

私はうめいている女の肩をつかみ引き起こし、外へ叩き出そうとした。女は力なく半ば体を私にあずけて立ち上がった。首が折れたように、顎が上がって、鳶色の瞳が私をとらえた。

「ごめんなさい」

その言葉もまた、三文役者の台詞のようだった。鼻から流れた血が色の薄い唇に暗い紅をさし、白い喉にも一筋流れ落ちた。

「ごめんなさい……」

女は同じ台詞を繰り返した。まったく同じ抑揚、同じ発音で繰り返した

ように耳には聞こえたが、脳髄にはまるで別人の言葉のように、この世でただ一人の愛する女の言葉のように響いた。

女は私の肩に両手をかけ、身を寄せた。半眼に開いた瞳が私の魂を（そんなものがあるとしてだが）とらえ、黄金の鎖で縛りつけた。

私は彼女にくちづけた。甘い匂いがする。かぐわしい香り。女の匂いではあるが、それだけではない何かが混じり、鼻孔から私を誘惑した。

「ランケン……帰ってきたわ……」

誰かがささやいた。女の唇は私の唇と重なっていた。記憶の扉が開かれようとしたが、錆ついた鍵がかかっているかのように、何も思い出せなかった。だが、扉の隙間から、ある臭いが漂ってきた。何か腐った臭い。よどんだどぶの臭い。すえた血の臭い。

私は無意識のうちに女を突き放し、頬を張り飛ばした。女は血を吹いて倒れる。

「おまえは誰だ。おまえは誰だ」

女を引きずり立たせて、私は詰問した。口と鼻から流れた血は墨でも混ぜたかのように、異様にどす黒い。腐った臭いがする。何が腐っているのだろうか。

女はほとんど意識がないようで、私の手の動きに合わせて、ゆらゆらと体をゆらすだけだった。だが、細い目の奥からは、変わらぬ視線が私をとらえようとしていた。血にまみれた口許に、笑みが浮かんだような気もした。

女を戸口まで引きずっていき、外へ叩き出した。女は石畳の上に倒れ伏したが、すぐによろよると立ち上がり、歩きだした。朝日を浴びた女の後ろ姿はひどくみすばらしいものに見えた。

次に目が覚めたときには、太陽は酉の空低く、家々の屋根が形作る鋸の歯に突き刺さるうとしていた頃だった。吐き気は消えており、空腹感も

あつたが、頭痛はまだ少しばかり尾を引いていた。

寝台に赤い染みがついていた。昨夜からの記憶が一気に頭を駆け抜け、頭痛を悪化させた。毛布には自分の体臭よりも強く、あの女の甘く、腐った臭いが染みついているような気がした。

玄関の呼び鈴がなっているのが聞こえた。男のものらしい声も聞こえる。寝台から立ち上がろうとすると、毛布が、女の肌のように身にまとわりついてくるように思えた。

扉を開けると、初老の男が立っていた。背が高く、幾分猫背気味で、白髪を後ろになでつけている。黒い上下を身に付け、右の袖には黄色と赤銀糸も混じった細かい刺繍のある腕飾りを巻いていた。服は仕立ての良い上等のものだったが、どことなくくたびれて見えた。

「スナブ・ランケン探偵局はこちらでございますね」

男は見下ろし気味に私の顔を見て言った。単なる確認のための台詞のようだった。

「私がスナブ・ランケンです。どんなご用向きでしょうか」

「私、イアハルト伯爵にお仕えする身のもので、ウィールドと申します。伯爵がランケン様になつての願いがあるとのこと、詳しくは、お屋敷の方でお話したいと存じます。馬車を用意しております、お乗りください」

私は胃から逆流してくるものをこの男に投げつけない衝動に駆られたが、あいにく、もう吐き出すものはなく、空腹感が私に理性を与えた。

私は外套をはおり、フアバーン剣を腰に吊るした。太古の失われた英雄から引き継いだこの魔剣は、ほとんどの魔力を三千年の時に奪われていたが、妖気を察して、持ち主に忠告するくらい力の力はまだ残っており、時に活性化して、私の命を救ってくれたことも幾度かあった。

家の前には、二頭だての、黒塗りに赤と黄と銀で浅浮き彫りの装飾がなされた馬車が待っていた。

ウィールドは自ら鞭を握り、私は一人赤い革張りの椅子に腰を降ろし

た。金がかかっていることは間違いないが、かなりの年代物の車らしく、所々、塗りが剥げていた。

伯爵の使用人は無言で鞭を鳴らし、馬車は夕暮れ時のラグラン大通りを走り抜け、ヘルキュの四つ辻を南に曲がった。アイトーネ街に向かうわけではないらしい。道の両側に並ぶ家々が少なくなっていく、同時にみずぼらしい半ば崩れかけた小屋のようなものも見受けられるようになっていった。太陽はほとんど、その姿を隠し、夕闇が辺りを包みだした。ウィールドは角燈に火を灯した。馬車は南へと進み、行く手には暮れかかる空にルクセン岬の突端にたつ廢塔がそびえたつのが、かすかに見て取れた。

馬車は市の南門を抜けて、半ば草に覆われた道を走り続けた。やや東へと道は曲がり、林の中を通り抜けるころには、辺りはすっかり闇に包まれていた。

空腹のせい、夜気がやけに冷たく感じられ、私は外套を体に巻き付け、肩を震わせた。馬車が止り、到着を告げるウィールドの声がした。

そこは大きな古びた屋敷の庭先だった。周りを囲むように生えている木々の幹が屋敷からの明かりを受けて、妙に白っぽく見える。屋敷は二階建てで、中央に大きな切妻型の屋根のついた入口がある。その上部には小さな尖塔がたっていた。玄関の両脇には松明が灯されていたが、その光から見て取れる範囲では、屋敷はかなり痛んでいるようであり、建築様式から見ても、百年以上の年月が建てられてから過ぎ去っているものと思われた。

「どうぞ、こちらへ」

ウィールドが角燈を手に私を案内した。

屋敷の中にはいると、私の推察はいよいよ正しいものと思われた。玄関を入った広間には、半円を描いて二階へと続く階段があり、その手すりの彫刻を見ただけでも、この屋敷が、確かな審美眼と、地位と財産に恵まれ

た者によって建てられたことはわかったが、時間がその富を情容赦なく蝕んでいた。

ウィールドは私を食堂とおぼしき部屋へと導いた。長い食卓には椅子が二十人分は並べられそうだったが、今は二脚しかなかった。細かな刺繍のなされた食卓掛には、埃こそ積もってはいなかったが、色はあせ、荒廃が目に見えない綻びをつくっているようだった。

奥の扉が開き、イアハルト伯爵があらわれた。車のついた椅子に座っており、ウィールドがそれを押し、伯爵を食卓につかせた。

イアハルト伯爵は老人だった。髪は豊かではあったが、見事なまでに白く、艶がなかった。額が広く、尊大そうな大きな鼻を持っている。大きな口は右端が引きつったように上がっており、しわのよった唇から、黄色っぽい歯がはみ出して見えていた。黒っぽい毛布を幾重にも体に巻いており、その姿は蛹になった虫を思い起こさせた。だが、蛹は新たな姿へと変化するが、この老人は何になるというのだろうか。白つちやけた肌には幾つもの薄茶色の染みが浮かび、瞳は伏せられて額の影に溶け込み、何の力も感じることはできなかった。

ウィールドが葡萄酒の瓶と硝子の酒杯を持ってきて、私と主に注いだ。「……遠いところをわざわざお呼びたてしましたな……ランケン殿」

老人は口を開いた。ゆっくりとした口調で、かすれそうな声だったが、見かけよりはずっとしつかりしたものが感じられた。イアハルトはまずは乾杯を言い、酒杯をすすめた。黒い布のひだの中から、枯れ枝のような細い手が出て、酒杯をつかんだ。ただ、杯をつかんだだけだったが、彼にとってはかなりの労働のようだった。

「ジョウル・ラーにー」

イアハルトは聞いたことのない存在の名を口にし、私達は酒杯を傾けた。私はさりげなく、ファバーン剣の柄に触れてみたが、妖魅の存在を示すしびれにも似た感覚は伝わっては来なかった。酒はまずくはなかった

が、酒か酒杯か、どことなくかび臭いにおいがするようになった。

「仕事を頼もうと思ってるな、人捜しを……」

伯爵は一息で葡萄酒を干し、震える手で杯を卓に戻した。

「娘を、イーヴァを捜し出して欲しいのだ」

「家出でもなさったのですか」

老人はかすかにうなずいた。唇から、ひとすじ葡萄酒がこぼれ落ち、黒い毛布に見えないしみをつくった。

「もう丸一月、家に帰っては来ない。ウィールドに八方手を尽くして捜させたが、一向に行方が知れないのだ」

「手掛かりになるようなことはないのですか」

イアハルトは弱々しく首を振った。イーヴァ・ライヴェ・イアハルトは今年十七になるイアハルト家の一人娘だった。二十九日の夜、忽然と屋敷から姿を消し、なんの音沙汰もない。脅迫の手紙が届くということもなかった。生来、病弱だったせいもあり、屋敷の中で本を読み、絵を描き、詩作に耽る内省的な娘で、男と駆け落ちなどということは考えられない。イーヴァの家庭教師としてここ一年ほど屋敷へ出入りしていた男で、シュヌベル大学の学生のヤズリーというものがいたが、この男は市の書記官の息子で、人柄もしっかりしているということだった。

イアハルト家はかつてはサンジェリイ南部の沼沢地に広大な領地を持っていたが、屋敷内に悪疫が広まり幾人もの死者を出したことなどもあり没落の途をたどり、今ではこの屋敷が残された唯一の財産だという。怨む相手はいても、復讐の対象などにはなりもしないと、伯爵はつぶやくように言った。

「そのヤズリーという者は調べたのですか」

「ウィールドが彼の家まで出向き、事情を話してきた。ヤズリーは大層驚き、また娘の身の上について心配しておったということだ。ウィールド？」

使用人は、待っていたように口を開いた。

「さようございます。ヤズリー様もお父上も大層、心を碎かれていますご様子でした」

「娘は神隠しにあったのではないかと、私は思うことがあるのだ」

老人は口許についた葡萄酒を今初めて気づいたかのように手で拭った。「あなたの噂はウィールドが聞き込んできてくれた。これまでいくつもの怪しものがかかわった事件を解決していると聞く。どうか、イーヴァを捜し出して、この屋敷に連れ戻してはくれないか。私の体も、この屋敷も朽ち果てようとしている。イーヴァがただ一つの輝きだ。頼む……」

老人のまぶたが初めて上を向き、褐色の大きな瞳が私を見た。萎びた生ける仮面の中で、その瞳は、母親を見失った子鹿の濡れた瞳のように見えた。

「噂は噂です。確かに怪しげな事件には幾度もかかわってはいませんが、力及ばないことも少なくなかった。しかし……全力は尽くしますよ」

伯爵はうなずき、まぶたを伏せた。

「あれがイーヴァだ。十六の誕生日の祝いにある画家に描かせたものだ。よく見て、覚えていってくれ」

ウィールドが燭台を持って、私の背の壁を明るく照らした。

そこには一枚のかなり大きな肖像画がかかっていた。胸の大きく開いた大人びた衣装を身につけたほっそりとした少女は、口許に弱々しい笑みを浮かべ、憂鬱な視線を私に投げかけていた。青紫の布地のせい、か、蠟燭の橙色の光を浴びてもなお、その頬は青ざめているようであり、ほっそりとした首には腰までとどく豊かな黒髪は重すぎるかのように見えた。何も装身具の類はつけてはいなかったが、右手の中指には大きな卵形の暗赤色の宝石の入った指輪をしており、その石の光のとどく範囲だけが血の気を帯びて、柔らかな桃色に染まっているようだった。

イーヴァは誰かに似ていた。帰りの馬車の中で、私はそれが誰であるか

に気づいた。イーヴァは、ごみの中にうずくまっていたあの女に似ていたのだ。

翌日は朝から雨が降っていた。とうに酒神アルオリークの精霊は去ってもよいはずなのに、頭の芯に鈍い痛みが残っていた。寝台には、まだあの女の残り香（なのだろうか）があるような気がした。

昨夜の伯爵に対する答えを私は後悔していた。あの肖像画を見た後であつたなら、恐らく、この一件を引き受けはしなかっただろう。

だが、すでに私はイアハルトに返事をしてしまっており、蓄えも底を尽きかけていた。仕事をする。金をもらおう。それだけのことだ。あの女がイーヴァであるという証は何もない。今、蠟燭の明かりで見た肖像画の記憶をたどっても、二人が同一人物であると判断する自信はなかった。二日酔いと蠟燭の揺れる炎がもたらした幻であるかのようにも思えた。

遅い朝食を取り、雨の小降りになるのを待って、出かけた。東門近くの駅前で馬を借り、葉の落ちかかった林の中の細い道を通り、沼地へと向かった。

アマアッサの家は奇妙なほどきれいな円形の小さな沼のほとりにある。着いた頃には雨がやや激しくなり、深緑の水を湛えた沼には、雨粒が小さな波紋を無数につくっていた。

小さな家は薔薇色と黄褐色が混じりあつた不思議な物質でつくられており、三階建の屋根は鋭い円錐形をなしている。歴史書を紐解かねばわからない恐ろしく古い優美な様式でつくられていたが、イアハルトの屋敷とは違って朽ち果てる様子は一向になかった。

アマアッサはいつものように、二階の部屋で、色とりどりの枯れ葉を集めたような柄の掛布がかかった低い寝台で、厚さが半メートルはある書物を開いていた。部屋の中央の囲炉裏には銀の椀の中で、独特の香りのする香が焚かれている。

「なんだか、久しぶりね」

少しかすれた細い声で彼女は言った。真紅のゆったりとした長衣をまとった彼女は初めて会った時と同じように若く美しかった。肌は異様なほど白く、しなやかな肢体もまた不自然なほどほっそりとしている。長く艶やかな黒髪も、水面下で見る陽光のような光を湛えた黒い瞳も、不可思議な紫がかった色合いを帯びている。『失われた神々の書』などに現われる、人類より古い種族の特徴を彼女は体現していた。

「眠っていても、時は流れる。でも君に会うとその事実を忘れてしまいうだよ」

アムアツサはくすりと笑い、本を閉じると、触れると折れてしまいそうなほど細い把手と脚のついた銀の茶碗に、マッシュウ茶をいれてくれた。

「あなたの骰子のために……」

小さな種を一粒入れると、さわやかな香りがひろがり、昨夜からの憂鬱が薄れていくような気がした。

私は行き倒れていた女のこと、イアハルトの依頼のことを彼女に話した。彼女はかすかな笑みを浮かべ、時折小さくうなずきながら話を聞いた。話を聞き終わると、様々な魔法の品々が並んでいる棚から、銀の丸い盆を取り出した。底には胎児とも魚ともとれる奇妙な生き物の浮き彫りが、精緻な技で施されている。

「今日は絵札を使うんじゃないのかい」

「雨が降っているから、これを使ってみようと思ったのよ。道具はただの道具、本質とはかかわりないこと、何を使ってもあまり変わりはないの」

アムアツサは盆に水を張ると、出窓を開けて、それを差し出した。

「ここに指を立てて、肖像画の女を思って」

私は銀の盆の真ん中に中指を立て、イーヴァの絵姿を頭に思い浮かべようとした。どす黒い血を流したあの女の顔が肖像に重なり、言いようのない不快感が込み上げてきた。

私の占い師は眉間に一筋のしわを寄せ、形の良い唇をわずかに動かして、秘密の言葉をささやいた。水面に落ちる雨粒を見つめる。ふれあった肩から、幻視が私にも伝わってくるのだろうか、雨粒の落ちる速さがどんどん遅くなり、水面に当たって砕け、波紋がひろがる様が、亀が歩くような遅さで、くつきりと目に飛び込んでくる。

アムアツサは盆を傾け、水を流した。心なしか、彼女の瞳は曇っているようだった。

「どうだい、彼女の行方は」

アムアツサは炉端に戻り、マッシュウ茶の入った椀を口に運び、だが飲まずに戻した。

「廃墟が見えたわ。崩れかけた漆喰、傾いた石柱、寺院のような建物、瓦礫の山、ごみ……ごみの山ね。廃物の中に彼女はいるわ。色も見えたわ。赤よ、とても濃い、黒ずんだ赤、腐った血のような……それから……それから……何かが彼女を隠してるわ、とても大きな影よ、彼女の影かも知れない、どちらの彼女かしら、わからない……」

「あの女はイーヴァなのだろうか」

「わからないわ。重なる部分もあるし、重ならない部分もある……ランケン……」

珍しくもアムアツサは口をにごし、言葉を選んだ。

「なんだい」

「……あの女と寝てはだめよ」

アムアツサは細い腕を私の首にからませ、鳥のように軽い体を預けてきた。暖かい唇が耳に触れる。

「寝てはだめよ、寝ないで。この仕事、止めたほうがいいわ。お金なら、少なからず工面できるわ、だから……」

いつもの超然とした態度を彼女が失っていることに私は少なからぬ驚きを受けていた。今、私の腕の中にあるのは、必滅の生の中で、無常の心

にすがりつこうとする生身の女だった。

「仕事は止めるわけにはいかないよ。何か、不吉なものでも見えるのかい」
「わからないわ。はっきり形を取っているものは何も無いわ。でも……廃墟が……あなたの廃墟かもしれないわ……」

それ以上のことは彼女にはわからなかったし、もちろん、私には皆目見当もつかないことだった。私に出来ることは、いつもより激しく彼女を愛することだけだった。

ヤズリーについて調べるのに二日ばかりかかった。家柄についてはイアハルトの言った通りだったが、人柄はそうでもなかった。

『機械の花嫁』という妙な名前の酒場はヴェルク街の怪しげな店が立ち並び通りにあった。右隣は小さな芝居小屋で、学生崩れの青年達がいかがわしい演劇を公演しており、左隣には法に触れる禁断の書物を扱う店が並んでいる。禁書と言つても、暗黒の領域の秘密を暴くものではなく、男女の股間の秘密を主に扱うものだ。

酒場の扉は大きな鋏の幾つもついた鉄張りのもので、ぴかぴかに磨き上げられていた。そこをくぐるのはかまどの中にも入る気分だった。

薄暗い店の中にも、鉄板や銅板が張られており、洋燈の火屋は赤、青、緑などの色硝子が使われ、尋常ではない雰囲気を出している。奥の鉄張りの壁には銅、鉄、真鍮などの金属で造られた女性像が置かれていた。細い金属の棒を複雑に張り巡らした骨組みに小さな金属板を慎重な芸術的配慮のもとに不均等に打ち付けたもので、醜悪と美の境界線に立っていた。肋の隙間やぼっかりあいた目の奥には大小の歯車が見えた。本当の天才を持ったからくり師なら彼女を夜伽の相手にすることも出来るのかも知れない。

客は十人ほどで、不規則な多角形の卓の三分の二はあいていた。裾の短い白と黒の太い縞模様の貫頭衣を着た女が注文を取りに来た。

まぶたを黒に塗り、右の頬には四という数字が書かれていた。

「ディコン、『古鴉』のものはあるかい」

「ございませんわ」

彼女はそう言つて薄い銅板に文字が浮き彫りになった品書きを差し出した。必ずしも高級なものばかりというわけではなかったが、あまり庶民には縁のない異国の酒と料理が並んでいた。麻薬入りと思われる酒の名前も幾つがあった。

「ゴルダラム」

私はカーラブの海を旅していたとき、幾度か飲んだ酒を注文した。

「ヤズリーは来てるかい」

「ヤズリー様ですか……」

給仕女はちらりと勘定場の主らしき男を見やつた。痩せた顔色の悪い（といってもこの店の中では本当の顔色などわかりはしないが）中年男はアニヤチ風の細い口髭をはやしダーチエン風の灰色の詰襟の服を着ている。女の視線にかすかにうなずいたような気もした。

「渡すものがある」

私は左手を懐にやり、右手では、女に十ダズン貨を握らせた。女はもう一度主人の方を見、男は爪を黒く塗った細い指で合図をした。

「こちらへどうぞ」

女は店の奥の東部風の衝立で仕切られた席へ私を案内した。

「ヤズリー様、お客様です。お渡しするものがあると」

曖昧な返事が聞こえた。

女を押し退け、私は衝立の向こうへ入った。酒卓はごく小さなものが置いてあったが、椅子は大きめの長椅子が用意されていた。

ヤズリーはその長椅子に若い女と二人で座っていた。上半身は何も見つけてはおらず、浅黒い引き締まった体には汗が浮かんでいた。まだ若く、顔だけは整っていると云つてもいいが、しまりのない唇が彼の品性に

傷をつけているようだった。彼は、右手で乳房をもみしだきながら、左手で女の下履きの飾り紐を解こうとしていたが、紐が指に絡まり、問題を難しくしていた。

「おまえは誰だ。おまえなぞ知らないぞ。ジャス、なぜ入れた」

ヤズリーははれぼったい目でこちらを見ながらそう言った。何か禁じられた薬を飲んでいるのかも知れない。口調はどこか上の空で、右手と左手は行為を続けた。女は私の闖入など意に介さず、赤い縮れた髪を揺らし、小さなあえぎ声を上げている。

「イーヴァ・ライヴェ・イアハルトについて聞きたいことがある」

「そんな女は知らない」

紐は解け、ヤズリーの指は赤毛の女の股ぐらに侵入した。女は大きな声を上げて、それに応えた。

「君がイアハルト家でここ一年ばかり、週に三回、イーヴァの家庭教師をしていたことは知っている。イーヴァは一月前から行方知れずだ。何か知っていることはないか」

「知らない」

私はヤズリーの左手首をつかむと、女の股から引つ張り出した。女は今初めて私に気づいたかのように、目を見開いて私を見た。彼の左腕には、蘭の花を非常に繊細な技巧で図案化した刺青があった。私は腕に力を込めた。

「もう一度知らないといったら、この手で女を抱くごんは出来なくなるぞ」
「知らないものは知らない」

ヤズリーは右手で、殴りかかってきた。身を反らしたが、拳が唇をかすめ、血がにじんだ。だが、私は腕を放しはしなかった。手刀を奴の首筋にお見舞し、膝で腹を蹴り上げた。優男はうめいて、胃の中のを吐き出し床に転がった。女は悲鳴を上げて、逃げ出した。騒ぎに気づいた幾人かの客が席を立つのが視界の隅に見えた。

「話せ。全部話すんだ。年寄りと世間知らずの小娘はだませても、僕はそうはいかない」

私はヤズリーの首に指をかけて、揺さぶった。外套の前が開いて、ファーン制の柄頭が覗いた。ヤズリーはそれに視線を落とし、鼻血をたらしながらうなずいた。

「俺は何もやっちゃいない。本当だ。ただ、ちよつとばかり、あのお嬢様にこの世の男と女の快楽というものを数えてやっただけだ」

「何をした、この屑野郎」

「生身の人間なら誰でもすることさ……イーヴァは、飲み込みのいい、立派な生徒だったぜ。週三回のお勉強はいつでも寝台の上でやるようになった……その内、どちらが生徒でどちらが教師がわからなくなっていた。この俺の方が、イーヴァの肉欲に仕える身になっちまった……」

ヤズリーは血と吐いたものにまみれた顔に陶酔の感覚を思い出したのか、薄笑いを浮かべた。

「本当さ。あの娘はたいしたものだった。どんな下劣なことでも、淫欲のためなら、おくせず出来るのさ……生まれながらの淫売なのさ……俺は官能の世界について、ずっと探求をしてきた。ミヤルマンにも行ったことがある。でもイーヴァは……あいつは淫魔なんだ……指輪の力だ。まるで……」

「お客さん、店の中で乱暴は困りますね。うちはやくざものの店じゃないんだ。シュヌベル大学の学者さんや、有名な絵描きの先生なんかもひいきにしてくれています。出ていってもらいましょうか」

店の主が後ろに立っていた。握った右手の拳の間から細長い針のような刃が飛び出していた。アニヤチの南部地方に伝わる『竜の髭』と言われる武器だった。目にも止らぬ早業で敵を刺し、猛毒を注入する。もちろん、使い手の腕によりけりだが、近寄って戦うのは極めて危険な代物だった。

「これはこれは……素敵なお店にふさわしい得物ですね、失礼しました」
私はヤズリーを立たせようとした。

「ヤズリー様も『機械の花嫁』の大事なお客様の一人ですのでね、手をはなしていただきますでしょうか」

私は彼の言うとおりにし、戸口の方へと振り向いた。同時に左足を回して、主人の右手を思い切り蹴った。主人は『童の髭』の腕を磨くより、戸口の鉄板を磨くほうが忙しかつたらしい。剣呑な武器は宙を飛んで壁に当たり、不愉快な金物が擦れる音を出した。

左足を主人の胸板に叩き込む。奴は椅子を二脚ばかり飛ばして仰向けに倒れた。

残っていた客が罵りや悲鳴を上げて戸口に向かう。その中に混じってヤズリーも出口へと駆けだした。

私は後を追おうとした。ヤズリーが『機械の花嫁』像の前を横切ろうとしたとき、それは起こった。

一瞬のことであり、私は自分の目を信ずることが出来なかった。

金属の女性像は、逃げるヤズリーに抱きつき、すがりつくこうとするように鉄板で覆われた両腕をのびし、倒れかかっている。生きた男と、鉄の女は恋人同士のようにからまり、倒れ伏した。『花嫁』のいたる所から飛び出していた、装飾的な金属板や、鋭い棒状の突起物は、その重みで深々とヤズリーの体に突き刺さり、色つきの明かりを塗りつぶすかのような真っ赤な血を吹き出させた。

色男は『花嫁』を抱いて死んだ。

だが私を真に驚かせ、恐怖の念を抱かせたのはその直前の出来事だった。ヤズリーに抱きつき、倒れかかるまで、『花嫁』はほんの二、三步ではあったが、自らの力で歩いたように見えたのだった。

警邏隊が来る前にと、私は店を出た。

そこに、ヤズリーと乳くりあっていた赤毛の女が立っていた。けばけば

しい赤と黄緑と水色の裾の短い胴着は前がはだけ、尖った乳房が突き出している。どぎつい珊瑚色の下履きは膝の当りにひっかかったままだった。顔は髪の毛の影になつてよく見えない。だが、何か、もやもやとした青白い煙のようなものが、口のあたりから吹き出しているようにも見える。通りを行く人々の騒ぎがふと遠いものになり、耳元で誰かが熱い息とともに名前を呼んだ。

「ランケン、私よ、帰ってきたわ」

赤毛の女の姿が揺らめき、あのごみの中で拾った女になった。濡れた銀の衣装が肌にはりつき、なまめかしい曲線を浮かび上がらせる。その姿が、また水面の影のように揺れ、イアハルト邸で見た肖像画になる。少女は孤独に曇った瞳で私を見る。褐色の瞳は見るうちに色が浅くなつていき、金色の光を発し始める。視線が私をとらえ、また私の背後に突き抜ける。イーヴァは黄色の衣装の裾をまくり上げ、股間に指を激しく擦りつけ、突き入れる。白い指にはまった指輪の黒ずんだ紅玉が、桃色の淫裂の中に埋もれ、また顔を出す。甘く爛れた香りがする。

どす黒い血の塊のような石が私の意識に何かを呼び出そうとする。視線を上げ、青い霧がからみつく彼女の顔を見やる。黄金の瞳だけが動かず、イーヴァとごみの中の女の姿が溶解して、もう一人の女の姿になる。記憶の扉が蝶番をきませて、開かれようとする。

「そこで何をしているー」

扉は音を立ててしまった。鼻孔に腐敗臭が突き刺さる。女の姿はない。濡れた石畳に足音を響かせて、警邏隊が数人、剣を手に駆け寄ってくる。

私は彼らと逆方向に、駆けだした。こめかみに、鈍い頭痛があった。二日酔いのせいでないことは確かだった。

「すると、あの指輪は十六の誕生祝いに送ったものと言われるのですね」

「さよう、祖父の代からの知り合いの宝石商人に頼んでつくらせたものだ、しかし、本当なのかね、その指輪をつけるようになってから、イーヴァの

様子が変わっていったというのは。私は……私は何も気づかなかった……」

イアハルト伯爵は、壁のイーヴァの肖像を見上げ、車椅子の中で一層小さくなつたように見えた。

「まだ、わかりません。その変化というものもヤズリーの思い過ごしなのかも知れませんが。宝石とはなんの関係もないものかも知れない。それに、年頃の娘というものはしばしば、親の想像を越えた何かを自分の中に見いだすものです」

老人はウィールドのついた葡萄酒を一口飲んで、うなずいた。

『機械の花嫁』での一件と、ヤズリーが語つたイーヴァの姿については伏せて、私は指輪に何か鍵があるかもしれないことをほめかすにとどめた。この老人には娘の真の（？）姿は刺激が強すぎるものと思われたし、私自身、ヤズリーの言葉がどこまで真実なのか、確証を持つことは出来なかつた。

「指輪をつくつたのは何という店です」

イアハルトは答えなかつた。私の質問が聞こえなかつたかのように、無言で手にした酒杯をなで回していた。私は彼の手首の内側に、ヤズリーの手首にあつたのと同じ絵柄の刺青が施されていることに気づいた。

「指輪をつくつたのは何という宝石商人のですか」

今度は私の声は彼の耳には届いたようだったが、どうやらそこで止つてしまつたようだ。

「はて、何という店だつたか。いや、思い出せぬ」

「代々ひいきにしている店ではなかつたのですか」

伯爵は白い眉を寄せ、本当に何かを思い出そうとしている様子だつた。

「……わからぬ。そう、ランケン殿の言われるように祖父の代から……おかしい、どうしても思い出せぬ」

私はウィールドの方へ視線を向けた。長身の男も、また、どうしても解

けない数式を押しつけられた学者のように、困惑の色を浮かべていた。

私はイーヴァの肖像に目をやり、画家の署名を探した。右隅に、プトナウと読める崩れた文字を見つけた。

「指輪は今でもここにありますが。それとも娘さんはつけて家を出られた？」

「わからぬ。調べてもみなかった」

「お嬢さんの部屋を調べさせてもらえませんか」

老父はあまりいい顔はしなかつたが、いやとは言わなかつた。彼にとつてただ一つの夢のある世界へ他所者の侵入を許すのは、あまり気の進まないことなのだろう。

イーヴァの部屋は二階にあり、食堂と同じくらいの広さがあつた。床と壁を、淡い桃色と渋い緑色を組み合わせた蔦模様の上品な色彩の絨毯と壁紙がおおっている。金塗りの額縁が五つあり、どれにも、一級の芸術品とは言えないが、嫌味のない素直な色合いの絵が飾られていた。画題は、民話や古謡に描かれる、浪漫的な男女の出違いや、神々の恋模様といった年頃の娘が好んで描きそうなものばかりだつた。

一方の壁には大きな姿見が置かれ、小物入れの引き出しが幾つもついた箆筒がある。エスカール風の洒落た花瓶にはまだ新しい蘭の花が飾られていた。

部屋に漂う甘い香りはその花からのものなのだろうか。それとも、今はいない部屋の主人の香りか。

明るい黄褐色の木材でつくられた書棚には、歴史書や哲学書、古今の有名な詩人の詩集などが並んでいる。けばけばしい表紙の小説本も何冊かあつた。背表紙には『セロッド夫人の真実の愛』とか『ロキオネンス祭りの恋』といった三文文士による（しかし、巷の話題にはなつた）恋愛小説の題名がかかっている。

寝台は天蓋もなく、質素なものだつた。細かな花柄の掛布がきちんとか

けられている。私はその上で互いの欲望を吐き出しているヤズリーとイーヴァの姿を思い描こうとしたが、どうにもうまく想像することが出来なかった。

「引き出しを開けて、調べますよ」

伯爵は部屋までは来ず、ウィールドがついてきた。使用人は無表情にならずいた。この屋敷には彼以外に使われている者はいないようだった。二回目の訪問でも、伯爵と彼以外の人間がいる気配は全くなかった。

私は姿見の前にある小さな筆筒の引き出しを開けて、中を調べた。簡単な化粧道具が少し、香水が一瓶、腕輪、脚輪、首飾り、髪飾り、指輪が合わせて三十ほど、淡い色合いを中心とした手巾や首巻き数十校がきれいに整理されて入っていた。一番下の段の中敷きの下から、数枚の厚い紙がはみ出しているのが目にとまった。肖像画に描かれた暗赤色の石の入った指輪はなかった。

「どうやら、あの指輪は持つて行かれたようですね」

ウィールドは最小限の言葉で肯定の意をあらわした。

「あなたは、イーヴァさんに何か、変わった様子があったとか、気がついたことはありませんか」

ウィールドは最小限の言葉で否定の意をあらわした。

私たちは部屋を出た。階段の踊り場で私は懐をさぐるふりをした。

「失礼、手帳を上置いてきてしまったようです。すぐ、戻ります」

私は階段を駆け上がり、イーヴァの部屋の引き出しを開けた。中身をぶちまけないように注意して、数枚の厚紙を引っ張り出し、外套の内側の隠しに入れた。ちらりと見たその紙にかかれていたものはとんでもないものだった。

イアハルト邸を出たその足で、私はトリプロ街に向かった。崩れかけた家々が道にのしかかるように立ち並び、怪しげな店の看板が連なる。夜

の店はもちろんのこと、遠くミヤルマーンあたりから取り寄せた、種々の麻薬を扱う店や、ある種の灰暗い儀式に使うとしか思われない、様々な器や燭台、短刀などを並べた店などが、尋常ではない目つきをした主人を戴いて並んでいる。

私は『ワコフの店』という、粗雑な飾り文字で書かれた黒ずんだ看板が出ている小さな宝石店に入った。この店を訪れたのは、何年ぶりかのことだったが、ワコフはあいも変わらず、店の奥の粗末な椅子に座って、薄汚れた布で、卵大の暗緑色の石を磨いていた。幾度見てもその石は特別美しいものとは思われず、どんな価値があるものなのかは、わかりはしなかったが、彼の生きがいにけちをつけることは、私に許されたことではない。

「エーヴン、ワコフ。石は元気かい」

私は『上流』階級の連中が使う気取った挨拶の文句を口にした。ワコフは顔を上げ、太い眉をびくりと動かした。

「エーヴン、スナブ・ランケン。どうしたね。また、ろくでもない事件に首を突っ込んだな」

サンジェリイの闇の宝石屋は、しわがれ声で、答えた、彼にとっては私と以前会ったのが何年前かといったことは、なんの興味もないことなだろう。私以外の人間でも同じことかも知れないが。

私はイアハルト家とかかわりある宝石商人を誰か知らないかと尋ねた。ワコフはしばし（緑の石を磨きながら）考えた末、ステリ街のベルターボンという店の名をあげた。

「確かなことはわかりませんが、ベルターボンの爺様が、昔、そのイアハルト家の没落について嘆いとったことがあったような気がするな。昔は、それこそ、樽で計るほど買ってくれたが、今じゃ、さっぱりだとな」

「もうひとつ、聞きたいことがあるんだ。この頃、魔力を秘めた宝石について何か聞いたことはないか」

ワコフは石を磨く手を止めて、縮れ毛の頭をかいた。彼に以前、そう

いった宝石について尋ねたときには、もう少しばかり、その髪は濃かったような気がした。

「また、怪しげなものとかかわってるのか。いい加減、まっとうな商売につくとか、考えたほうがいいんじゃないかねえのかい」

私は苦笑した。この男からそんな台詞を聞かされるようでは、私も年貢の納め時なのかも知れない。

「今でも十分、まっとうな仕事さ。誰にも命令されることはない。これ以上まっとうな商売はほかにない」

ワコフは緑の石に視線を落とし、にやりと笑った。

「こういう噂を一、二年前に聞いたことがある。ルクセン岬の近くの海辺で、漁師の子供が卵くらいもあるきれいな石を拾った。しばらくは子供がおもちゃにしていたが、値打ち物かと思つた親父が、市内に来て、ケイドとかいう馬鹿な宝石屋に売った。その宝石屋はその石に特別な力があるなどとは夢にも思わなかった。奴は石を三つに割って、ほかの宝石屋に売った。ケイドはその後、全身が腐る奇病に取りつかれて死んだという話だがね。ついでに言うと、石を拾つた漁師の一家も、全員気が狂つて、死んだという噂もある」

私は、手足が冷たくなつていくのを感じた。暑くもないのに、冷たい汗が吹き出していた。幻覚の中で聞いた言葉が、頭の中にこだまする。……ラケン、私は帰ってきたわ……

頭が痛む。埃くさい店の中に、あの匂いが漂っているような気がする。かいだ事のある匂い、聞いたことのある声なのだ。しかし、どうしても、脳髓の奥にそれは埋もれて、出てこようとはしない。

「ワコフ、石はその後どうなった」

「知らん。幾つかの店を流れて、何も知らない腐れ貴族か、商人かが買って、大事にしているんだろうよ。ここ一年ばかりは何の話も流れてはいないな。まあ、何も知らない奴が指輪か何かになっているのが一番に違いない

ぜ。恐らくは、灰霧の島の魔道士あたりが何かの呪いでもかけていた石なんだろう。イアハルトがそいつを手に入れたつてのかい」

「また、わからないね」

「イアハルトなら、あの石の真価を知っているのかもしれない……」

ワコフはまた、石を磨き始めた。だが、手つきはぎこちなく、あまり熱は入らないようだった。

「イアハルト伯爵とは何者なんだ」

「おまえさんが話したとおりの没落貴族さ。ただ、イアハルト家が今みたになつたのは、ただの悪疫のせいじゃなくて、何代か前に王宮での勢力を拡げるために異界のものと取引をしようとして、大きな術にしくじつたせいだという話もある。今の当主がどんな奴かは知らないがね」

私はワコフに礼を言い、デリン船長の目が明いている方の横顔が刻まれた金貨を彼の机の上に置いた。宝石商人は何も言わずにそれを懐におさめた。

スデリ街のイヌン川沿いの通りでベルターボン宝石商会という、小さな看板を見つけたのは、もう陽も暮れかかる頃だった。けして大きな構えの店ではなかったが、イリヴァーツ風の潇洒な造りの店で、通りに面する陳列台には見事な細工物の首飾りや指輪が、緋色の絹布の上に、品良く並んでいた。

主人は、イリヴァーツの出入らしく、ジャクレン教徒が好んで着る橙色と濃紺を組み合わせた複雑な模様の織り込まれた肩の角張つた服を着ている。ワコフの言つたとおり、かなりの年齢の男で、頭はきれいに禿上がった。着物の文様はジャクレン教の聖典である『五つの教えの書』からとられた聖句を圖案化したものだったが、その聖句は彼の現世の命を守るには役に立たなかったようだった。

彼は死んでいた。五色の敷石が張られた店の床の真ん中に仰向けに倒

れ、息絶えていた。見開かれた瞳は濁り、視線は当て所ない宙を指している。半ば口を開いたその顔は、恍惚と恐怖が入り混じったものをあらわしているように見えた。

こわばった両手の指は灰石をひっかくようにたてられ、引きつっている。筋ばった首に手を触れるとまだ温もりが残っていた。

私は彼の白い洋袴の股間に染みがついているのに気がついた。二つの臭いがあった。あの女の甘ったるい臭いと、男の樹液の臭いが、かすかに店の中に漂っていた。

帳場の奥の棚には、やや黄ばんだものから新しいものまで、幾冊かの帳簿が並んでいた。去年の年号が書かれたものを手に取り、開こうとする、背後で声があった。

女と男が寝室で上げる声だった。振り向くと、死体が動いていた。手指を硬直させたままベルターボンは腰を動かし、開いたままの口からひゅうひゅうと異様なあえぎを上げていた。

視界が揺らいだ。夏の日差しの中にいるかのように、床から陽炎が立ち昇る。ベルターボンの死体の上に、人影があるように見える。白っぽいほっそりとした影が、死体の腰の上に股がり、身をくねらせている。

影は淫らな声を上げている。それは、自分の乳房をかきむしるようにもみしだきながら、私の方に顔を向ける。あの女だ。ごみの中にうずくまっていたあの女が、淫欲に火照った顔で、こちらを見ている。琥珀の瞳は私を誘っている。どんな娼婦も顔を背けるような動きで、瘦せた裸身を蛇のようにくねらせ、私を向こう側へ誘っているのだ。薄茶色のまぶたは快樂の波に合わせて細められ、こじんまりとした鼻の穴は開かれて、荒い息が洩れる。唇は内から血をにじませたように赤く、しどけなく開かれたまま、よだれを垂らしている。その顔が、肖像画の少女と重なる。黒い髪は、幻のように背中で揺れ、次の瞬間にはうなじで跡切れる。

私は半ば恐慌に襲われ、剣を抜いた。ファバーン剣の神秘文字はぼんや

りと緑の光を発している。

「消えろ！」

私は笑みを浮かべる白い亡霊に剣を降り下ろそうとした。剣を頭上に降り上げたところで、私の動きは止った。どうしても、それ以上、体が動かなかった。どうしても、この女を斬ることが出来なかつた。

女は、イーヴァは、宝石屋から身を離し、私の前に来た。私は剣を降り上げたまま、彼女の瘦せた裸身に見入った。骨が浮いてみえる胸に、薄い円錐形の乳房がはり付いている。頂の小さな乳首は不自然に赤く、ひどく淫らな印象を与える。肉の薄い腹の下の方にごく薄い飾り毛が見えた。

イーヴァは私の首に手を回し、顔を引き寄せた。半眼に開いた金色の瞳が、私を囚える。唇が重ねられる。あの甘美な香りが鼻孔を満たす。彼女の鼻から、口から生暖かいものが流れ出る。蜜のように甘く濃密なものが私の中に溢れる。

息が詰まりそうになり、必死で、後退る。彼女は口と鼻と喉を、どす黒い血でべっとり汚し、笑っている。私は咳込み、彼女の血を吐きだした。

私は踵を返し、帳簿をつかんで逃げ出そうとした。だが、私の指が触れたところから帳簿に真紅の染みが広がって行く。生臭い血の臭いがして、見る見るうちに棚の中の帳簿は血の池に浸したかのように真っ赤に濡れそぼっていった。

赤い雫をしたたせるそれを抜き取りひろげる。どの頁を開いても一面の赤が広がっているだけだった。帳簿は、手の中でぐずぐずに崩れ、溶け出して指の間からこぼれ落ちた。

私は無意味な叫び声を上げ、出口へと駆けだした。イーヴァの幻は低い笑い声と共に、白い霧となって消えた。あの匂いと唇の感触だけが、いつまでも私の後を追って来るように思えた。

私はふらつく足で『アトスの店』の前にたどりついた。馴染みぶかい扉

の酒神アルオリクの紋章を見ると、胸の鼓動が少しはおさまってくるような気がした。

「ランケン、しばらくじゃない」

ミューツィーが変わらぬ明るい声で迎えた。秋だというのに、彼女は袖なしの、肌もあらわな黄色い服を着ていた。腰を焦げ茶の帯がきゅつとしぼり、豊かな乳房と尻をいつそう大きく見せている。

「デイコンでいいの」

「ああ、いや、シエアにしておくよ。喉が乾いた」

私は壁際のいつもの席に陣取り、店の中を見回した。この店に来るのは、実際数ヶ月ぶりだったが、もう何年も来ていなかったような気がした。傷だらけの丸い卓が幾つか並び、止り木に椅子が幾つか、帳場の奥にはデイコンの酒瓶とシエアの樽、酒杯が並んでいる。煤けた古い燭台。豆の殻がばらばらと落ちている床は歩くときしむ。

まだ陽が落ちて間もないせいか、客はまばらだった。ミューツィーは、銅の大きな酒杯を二つ持つてきて、私とともに座った。私たちはアルオリクのために乾杯した。

「何だか、顔色がよくないわ、どうしたの」

「いや、何でもない。疲れてるだけさ」

「そう、ならいいけど」

私は喉を鳴らしてシエアを飲む、ミューツィーの横顔を見た。大きな茶色の目、少しばかり上を向いた鼻、肉感的な大きな口、少しだけ尖った願ナクシャッツの密林に咲く大きな極彩色の花を思わせる派手な顔たちだった。彼女目当てにやってくる客は数知れない。

私たちは取り留めもない、世間話をした。裏の夫婦に子供が産まれたとか、角の爺様が亡くなったとか、エイマン王は近頃、奥方の浮気に悩んでいるとか、何とかいう美形の役者は悪い病気にかかって鼻が落ちたとか、そういう話だ。ミューツィーの横顔を（それと豊かな胸を）見ながら、そ

ういった会話を交わしていると、先刻までの異常な事件が、悪い夢のように思えてくる。彼女の陽気な声は、揺るぎない大地に支えられているかのように、私に安堵感を与えた。

「今日は君一人なのかい」

「父さんはボジュイルに大叔父さんの葬式に出かけてる。シエペッドはノンカまで、居酒屋組合の会合で出かけて、二人とも今日は帰らないわ」
ミューツィーは、十五の小娘が初恋の男と会うときのように、嬉しそうな顔をした。

「若妻が一人では危ないね」

「泊まっていつてよ」

「旦那に悪い」

ミューツィーは子供のように口を尖らせた。

「あの人、料理の腕は若いのにすごいんだけど、寝床の上では、半人前なのよ。ねえ、ジクロイス教徒にでもなったわけじゃないでしょ」

突然、頭の中で、閉ざされた扉がきしむのを感じた。ミューツィーの言った最後の言葉が錆びついた琴線に触れ、大きな不協和音を響かせた。ジクロイス教徒……厳しい禁欲と戒律で知られる新興の宗派……彼らとは、過去に幾度か、あまりありがたくなにかかわりを持ったことがある。そう、ボジュイルでの一件があった。それから、それから……

「ランケン、あなた、変よ。やっぱり、休んでいつて」

私はミューツィーの胸に顔を埋めたかった。何かが私を壊そうとしている。

「ミューツィー……」

私は彼女の手を握った。

「ミューツィー！」

シエペッドの甲高い声がした。私たちは、慌てて、それぞれの銅杯を持ち、シエアに口を付けた。

「あんだ……」

ミューツイーが失望を隠さない声で言った。

腕のいい、人もいい料理人は、片手に山鳥、片手に、ナノンカ名産の魚の干物を持ち、玄関に立っていた。赤い鼻の頭に汗が浮かんでいた。

「君一人にしておくのが心配だね。寄り合いははやめに片付けて、急いで帰ってきたんだ。やあランケンさん、久しぶりですね」

彼は疑うことを知らない口調でそう言った。

「今、君の料理の腕前について、奥方からうかがっていたところさ」

彼はにこりと笑い、右手の山鳥を差し上げてみせた。

「今、美味しいのお造りしますよ」

「いや、せっかくだが、まだやることがあるんでね、失礼するよ」

ミューツイーが卓の下で、私の外套の裾を引っ張った。

「君が山鳥の代わりになればいい。そうすれば、昇天できるさ」

私はそうミューツイーにささやいた。彼女は私の足を手ひどく踏んづけた。やはり、ここは私にとって失われた場所であるように思われた。

家に戻り、デイコンを酒杯に注ぐと、私は机の上にイーヴァの部屋から持って来た紙をひろげた。縦が三分の二イート、横が一イートほどのその紙は、画家が素描などをするのに用いるざらついた表面を持ったものだった。

紙は三枚あり、何れも鉛筆と桃色の色チョークを用いて、ある主題のもとに絵が描かれている。一枚は全裸の女が大きく股を開き、股間に馬ほどもありそうな大きな張り型を突き立てている絵、もう一枚は、男と女が交わっている姿を描いたもので、女は膝をつき、尻を突き出し、男はその背後から犬のように女におおいかぶさっている。残りの一枚は男の逸物を口いっぱいに入れて入れている女の顔を描いたものだった。

技巧的にさしたるものはなかったが、異様とも思える力がその絵には

あった。何回も執拗に重ねられた描線一本一本に激しい情欲がにじみ、その姿態は狂気じみた快樂の極みに歪み、ねじれているようだ。髪を乱し、玉の汗を浮かべ、よだれを垂らしたその顔は、どこか人間離れた形相を呈していた。

男はヤズリーに似ていなくもなかった。女はイーヴァだった。あの肖像画に描かれた清楚な少女像からは随分と遠い所に彼女は立っていたが、それでも今にも悶絶するかのような、淫らな悦びに満たされた表情のその女はイーヴァに間違いなかった。

絵には隅に小さな細い飾り文字で、イーヴァという名が記されていた。その署名だけが、あの肖像画に描かれた少女の残滓のように見え、奇妙な違和感をもたらしていた。

三枚の絵を見つめていると、股間のものが固くなってくるのを感じた。絵の中のイーヴァの瞳にはいつしか、淡い金色の光が宿り、私に向けて、蜘蛛の糸のような視線を投げかけているようだった。銀色の服を着た女の唇の感触がよみがえり、どこからか、彼女の匂いまで漂ってくるような気がする。

私はデイコンを喉に流し込んだ。強い酒の刺激が、床に横たわっていた寶石商人の姿を思い出させた。私は絵を丸めて、引き出しにしまいこんだ。

見えざる力が私の探索の邪魔をしていることは明らかだった。その力とは、イーヴァを変え、どこかに連れ去ったもので、どうやらその源泉はあの指輪、黒ずんだ血のような色の石にあるらしい。

脳裏にあの女の声がよみがえり、柔らかなで魅惑的な響きをもってこだまする。……ランケン、私よ、帰ってきたわ……

これまで起こったことを合わせて考えると、あるおぼろげな影が見えてくる。いや、意識の奥深くでは、それはもはや幻ではなく、実体を持つたある姿となっていたのだが、私の理性はそれを否定したがっていた。

何かが、誰かが、私の記憶のどこかに封印を施していた。その記憶は境界に縛られた魔物のようにもがき、意識の表へと出たがっていたが、私の内と外の何かの力によって封せられていた。

私はディコンをもう一杯注いだ。『古鴉』とくすんだ金茶で書かれたはり札には、畑で種をついばんでいる少々ひねた顔つきの鴉が描かれている。マルテやパイレのものより香りがきつく、粗野な味だったが、値はかなり安い。

いつもより早い時間に床についたが、眠れなかった。ここ数日の出来事が頭の中でへたくそな喜劇役者の手によって、でたらめな順序で繰り返して上演された。各々の幕はだんだんと短いものになっていき、第一幕だけが、くつきりと、残っていく。そこだけは喜劇にはならず、役者も一流だった。

銀色の服の女が私の寝台にいる。白い肌、黒い髪、琥珀色の瞳、甘い息しなやかな身体……くちづけの感触がよみがえる。彼女が流した黒ずんだ血が唇にふれ、舌に流れる。それは芳醇な葡萄酒のような味がした。まろやかで、舌を包み込むような柔らかな刺激。私は彼女の顎や首筋、鼻の穴に舌を這わせ、甘い血を味わった。再び唇を重ね、私たちは互いの舌先に情欲を集めて、からめあった。固くなった彼女の乳首が私の裸の胸に触れる。

目の前にある金色の瞳が私を見る。そのまなざしは私の瞳を突き刺し、脳髓に直接触れて、私の中から何かを剥ぎ取り、何かをつかみ取り、魂に淫らな踊りを教え込む。永遠に終わらない踊り、命の果てるまで、舌、情念の尽きるまで続く終わりのなき欲望の踊りだ。そしてまなざしはさらに奥深く突き入り、ついには私の頭蓋を突き抜けて、世界の裏側にまで達してしまふような気さえる。私を見ている、どこも見ていない琥珀の瞳。

彼女の白い頬は血の気を帯びて燃え、目は淫らな炎に赤く染まっている。私は彼女に尋ねる。

「おまえは誰だ」

彼女は私に唇を押しつけたまま笑う。

「……おまえは誰だ」

「あなたの……恋人よ……」

彼女は私から体を離し、夜の町へ出ていく。私は彼女の後を追う。街路は雨に濡れている。青白い月の明かりが濡れた石畳を照らし、反射した光が妙にまぶしく目を射る。彼女はその光る道を歩いていく。身にまとった銀の裾の短い服は第二の皮膚のように体にはり付き、一歩ごとに美しい曲線の動きを際立たせている。短く切った黒髪の下にのぞくうなじが月光を浴びて驚くばかりに白く見える。

街には人々が溢れている。サンジェリイの夜は遅い。夜半まで、居酒屋の並ぶ通りには人々が行き来し、陽気な、時には悲しい歌を歌い続けている。だが、誰も彼女に気づく人はいないように見える。誰もが、他の何かに気を取られていて、彼女の姿が目に入らないかのように、彼女は人の流れに逆らって、水の中を行く魚のように街路を歩いていく。

やがて、人波と街並みは途絶えた。

彼女は廃墟の中に立っていた。

夜空は黒い水たまりのように静かに波打ち、時折、波間から星々が弱々しげな光を見せる。その下に、瓦礫の山が横たわる。所々に残っている白っぽい石柱と、白っぽい壁。

そこは寺院の跡のようだ。まだ残っている壁には崩れかけた何かの象徴の浮き彫りがある。何を意味している形なのだろうか。見覚えがあるが、思い出せない。

瓦礫の中に、彼女はたたずんでいる。白い顔に月光がさし、冷たい光が反射されて、奇妙にまぶしい。笑みを浮かべる彼女の色の薄い瞳が私を呼んでいる。

近づくと、そこはかつて何らかの存在が祭られていた場所であることに

気づく。石造りの祭壇は傷つきながらも、まだ、滑らかな表面を保っている。周囲にはたくさんのお供物が捧げられている。廃物の山。錆つき刃のこぼれた長剣、二つに割られた古風な兜、ひびだらけの皿や盃、黴がはえ、ばらばらになった書物、脚の取れた椅子、しおれたたくさんのお花、腐って崩れた果実の山、腐敗臭を放つ得体の知れない肉、砕け骨……ごみの捧げ物の中に祭壇はあり、その前に彼女がいる。

霧雨が降っていて、白蛇の革でつくられたような服が濡れて体にはり付き、ぬめぬめと光る。短い髪もまた、濡れて、額に、頬にはり付く。

彼女の唇が動いて、音のない呼び声を形づくる。私の名を呼んでいる。私の名を……

私は彼女を抱きしめ、その名を呼ぶ。私の唇も動いているが、私にはその名を聞くことが出来ない。いぶかる間もなく、私と彼女の唇は重なり、私たちは祭壇の上に身を横たえる。体の下で腐った果実が潰れ、べっとりとした感触があり、腐った臭いが立ち昇る。が、それは極上の羽根蒲団の寝床のようでもあり、レネシャンの飛び切り値の張る香水のようでもある。

脱ぎ捨てられた彼女の服は蛇の抜け殻のように半ば透き通り、とろけて消える。

私は彼女の少女のような乳房を握り、もみしだく。欲情の大波が二人の体を内から揺り動かし、貧るように舌をからませる。彼女のあえぐ声が、耳を介さず、頭の中に響く。熱く、濡れた彼女の秘所を私の手はまさぐり、愛撫する。柔らかい濡れた肉は生き物のように私の指にからまり、吸いついてくる。手のひらで雛尖をこすり上げようとする。彼女のそれは固く、大きく、張りつめている。手の動きにあわせて、太股が引きつるように動くのがわかる。手の中でそれは、ますます固くなり、大きくなっていく。指先ほどの大きさになったそれは、石のように固く、しかし、熱く脈打っている。しどけなく開かれた、彼女の股間に私は目をやる。ほとんど

ど無毛に近い恥丘に、象嵌されたように赤くぬめぬめと光るものがある。黒ずんだ紅色の奥に、渦潮のように何かが轟き、明滅している。あの石だ……

私は身を起こし、祭壇から降りようとする。アムアッサの音が耳の奥でささやく。その女と寝てはだめよ……

だが、私は身を離すことは出来ない。彼女の金色の瞳が私の脳に蜘蛛の糸をかけ、引き寄せている。それは脳のしわの隅々にまで入り込み、強烈な快楽の液汁を染み込ませる。私の逸物はすでに彼女の淫裂の奥深く挿入されている。

彼女のか細い腕が、抗い難い力で、私を抱き寄せる。私はあばらのういた瘦せた胸に指を這わせ、尖った乳首を含み、白い喉をなめまわす。そこに、見えない髪の毛の感触を感じる。重い黒髪の方が私の鼻をくすぐる。「イーヴァ」

彼女は首を振るが、それは私の呼んだ名にうなずいたものか、激しく突き動かされる男根に応えたものかはわからない。

恐ろしいほどの悦楽の頂点で、私は彼女の胎内深く射精する。私は彼女が決して孕むことはないことを確信する。彼女は産む女ではない。

彼女の肉壁から、私の逸物が引き抜かれる。彼女の淫水と私の精液が混じりあい、彼女の恥丘に滴る。

赤い宝石と化した彼女の雛尖が突然、まばゆく光る。真紅の光の海の中に私たちはいる。どこかで、人の声が聞こえる、大勢の人の声、歓喜の声が聞こえる。

冷たく暗い寝床に、私は横たわっていた。

体中を虚脱感が覆っている。

まだ夜は明けない。

股間に生暖かい感触があった。私は精を漏らしていた。部屋には自分

の精液の臭いと、あの女の甘く腐った香りがかすかに漂っていた。

昼過ぎに私は目を覚ました。それと気づかぬうちに寝台に彼女の姿をさがしたが、彼女はいなかった。

探索の手掛かりは私が触れると皆、跡切れていた。イアハルトとウィールドは肝心な記憶を欠落させていた。故意に私を困惑させようとしているとするには、あまりに見え透いている。ヤズリーは死に、ベルターボンも死んだ。アムアッサの占い通り、何かの力が私からイーヴァを隠していた。もう一人のイーヴァの幻は私を幻惑する。占いの通りに、髪は短いイーヴァは廃墟にたたずんでいた。

アムアッサはイーヴァを抱くと言った。私はすでにイーヴァを抱いたことになるのだろうか。

廃墟を見つけたこと、肖像画家を捜し出すこと、この二つが私に残されていた。もうひとつヤズリーとイアハルトの手首にあった蘭の刺青も、気にかかっていた。

私はワイセン十字路近くのサンジェリイ画商組合の会議所に向いた。応対してくれた中年の口髭の男は、いぶかしそうな顔付きだったが（肖像画など頼むような人間に私は見えなかったのだろう）、プトナウの住所を教えてください。

「プトナウはいないかも知れませんよ」

男は赤い首巻きの位置を直しながら言った。

「どこかへ逐電でも？」

「あまり、お話ししたくはないことですが、プトナウは近頃、いかがわしい書物の挿絵に手を染めたとかで、役人に目をつけられているようです。我々としても、信用に関わりますから、本人を呼んで話を聞きたいのですが、一向に出て来ないのでですよ」

「なるほどね。だが、腕には変わりはないだろう」

プトナウの住まいは、サイマー街の新月通りだった。アーメット大通りからは通り二本ほど隔てたところで、夜ともなればその名の通り、闇が覆い尽くす寂れたところだった。古びた三階建の建物の二階に彼の部屋があった。一階は靴屋だったが、黴の生えた革が何枚か放り出してあるきりで、主人も客もいなかった。

私は狭く急な階段を足音を忍ばせて上がった。また死骸に出くわすのはご免こうむりたかったが、何が出てくるのはわかったものではない。剣の柄に手をやってみたが、何にも異変を知らせるものはなかった。

少々かしいでいる扉にはプトナウ・カンデル、肖像画そのほか承りますと書かれた画布の切れ端が打ち付けてあった。

どうやら、部屋の主は生きていた。扉の向こうからは、寝台がきしむ音と、男女の生臭い息の音が洩れていた。

扉とかまちの間隙から中を覗いた。女の白い背中が見える。細身で短い黒髪の女だ。女は、男の上に馬乗りになって腰をゆすっている。男の褐色の腕が、女の白い尻の肉をつかんでいる。

私は宝石屋での惨状を思い出し、部屋に飛び込もうとしたが、思い止まった。ファバーン剣は反応を示さず、また、女の姿も、幻ではなく、しっかりと重みを持ったもののような気がしたのだ。

交わりは延々と続いた。やがて、二人は体の位置を変え、再び行為に耽った。

男は、ナクシャツツ辺りの血を引いているらしく褐色の艶やかな肌をしている。ちらりとしか見えなかったが手首には例の刺青があったようだった。歳の頃は四十過ぎか。プトナウという南方系の名を考えるとこいつが肖像画家と見てもよさそうだった。

女はあの女、私を惑わし続けるあの女だった。女のあえぐ顔は、イーヴァの描いた春画の中の彼女と良く似ていた。

いつ果てることなく、二人は互いの肉を貪り続けた。手のひらに汗がに

じむ。逸物が固くなっていくのがわかる。

私は汗で滑る手で、剣の柄頭をつかんだ。魔法の感覚はなかったが、それでも多少は理性が戻るような気がした。ここで、呪縛に囚われるわけにはいかない。

体を引きずるようにして、壁にもたれながら私は階段を降りた。

斜向かいに、流行らない古惚けた茶店があった。店の前の今にも壊れそうな椅子の一つに座り、マシユウ茶を注文した。出口は一つしかないことは確かである。しばらくは張り込むしかなかった。飲物はお湯に色を付けたような代物だったが、飲むと、幾分かは頭がはつきりしてきた。

マシユウ茶をもう一杯飲み、しょっぱい粥を胃に流し込むと、辺りは夕闇に包まれた。

二人が階段を降りてくるのが見えた。画家は黒い外套をはおり、女も黒っぽい袖なし外套を着ている。二人は足早に石畳の路地を歩いていく。

私は後を追った。女が半歩先を歩き、プトナウはその後をついていくようだった。つけて行くうちに奇怪なことが起こる。私は自分がどこを歩いているのか、わからなくなったのだ。サンジェリイの道のすべてを知り尽くしているわけではなかったが、夜とはいえ、市街で自分の居場所がわからなくなるようなことはないはずだった。しかし、私は見覚えがあるようでない暗い路地を二人の後を追って歩いているのだった。

不意に追跡行は終わった。あの、夢で見た廃墟にいたのであった。廃墟にはすでに、数十人の人々が集まっていた。暗くて、顔だちまではわからないが、皆黒っぽい外套をはおっているようだった。

廃墟の中央には松明が灯され、祭壇を照らしている。夢で見た通りのみ屑のような捧げ物がある。

人々の詠唱が聞こえる。聞き慣れない、しかし、どこかで聞いたことがあるような言葉を単調な旋律に乗せて繰り返している。私にはその言葉を聞き取ることが出来ない。耳に音としては聞こえるが、言葉として意味

をなさないのだ。

祭壇にあの女がのぼる。彼女は集まった人々の（何らかの信徒なのだろうか）野卑な喜びの声の中、着ているものを脱ぎ捨て、白い裸身をあらわにする。自ら、股を開き、肉の裂け目を広げ、さらす。祭壇を囲む人々は一斉に黒い外套を脱ぐ。皆、その下には何も着ていない。老若男女の裸体が並ぶ。

良く見ると、人々は皆、体のどこかに、あの蘭の花の刺青をしている。腕に、乳房に、腹に、うなじに、男根に、尻に、紅色の乱が咲き崩れている。

祭壇の女は、下腹を突き出す淫らな踊りを踊りながら信徒の中から、一人の男を指名する。男は祭壇にのぼり、二人は、狂おしくちづけをかわす。二人は祭壇に横たわり、互いの股ぐらに顔を突っ込む。

待つていたかのように、乱交が始まる。人々は、異性同性の区別なく、抱き合い、肌を重ねる。

松明の揺れる炎が、祭壇で色情に狂う二人を照らします。男の顔が、明かりの輪の中に入り、はつきり見えた。

全身に汗が吹き出し、額のあたりがひどく痛んだ。異常な興奮が、胸の奥から沸き起こり、私は獣のような叫びを上げた。祭壇の上の男は私だった。髪の毛の短い女と、曲芸師のような姿で交わっている男はこの私にほかならなかった。

私は剣を抜き、廃墟に飛び込んでいこうとした。崩れた壁を飛び越え、走りだした。わめき続けていたが、行為に耽る人々は誰も気づかないようだった。

瓦礫に足を取られて転んだ。口の中を切って血が流れ出す。剣を杖に立ち上がろうとする。刀身の緑の光が私の目を焼いた。刻まれた太古のファーン文字は、超自然の力が働いていることを示し、幽気のような青緑の光を放っていた。

刀身を頬に押し当てた。氷のように冷たい。熱を出すことのない、炎をかき消す光だった。

冷気が、どうにか私の鼓動を静めた。私は剣を頬に当てたまま、瓦礫の中を無様に這いずるように、逃げ出した。

背後では、私とあの女の荒い息が宙を満たすように響き渡っていた。意味の取れない詠唱は、しつこく、耳の中にこびり付き、ライアノン通りまで私を追ってきた。

次の日は薄灰色の雲がサンジェリイの空を覆い尽くしていた。目が覚めたが、時刻はさつぱりわからなかった。腹がすいているのかどうかさえ、良くわからなかった。乾いた麺麭と乾し肉をディコンで流し込んだ。喉に真綿、腹に焼けた石を突っ込まれたような気分だった。

今まで起きたことを、頭の中で整えようとした。何らかの淫祠邪教の類が存在している。イーヴァはその巫女にされているのだろうか。それもあの女が、イーヴァだとしての話だが。もしそうだとしても、それはイーヴァの意志でなされているのだろうか。ヤズリーの話、イーヴァの署名のあった絵からすれば、そうとも思える。蘭の刺青は、しかし、イアハルトの腕にもあった。イアハルト、ヤズリー、プトナウは、皆通じていて、イーヴァを邪教の生贄にしているのだろうか。

そして、あの石だ。石には、どんな魔力が秘められているというのか。私はこの一件にどんな関わりを持っているのだろうか。

私はすべての疑問の答えを知っているような気がした。だが、それは記憶の水底深く沈められ、引き上げようとすれば、何かが綱を絶ち切り、意識の海に大波を立てるのだ。この奇怪な一件の真の主演はイーヴァではなく私であるのかも知れない。

私は街へ出た。

残された手掛かりを追わなければならない。この事件は何よりも自分

のために解決しなければならぬのだ。しかし、靴には鉄の轡がつけられたようで、腰のファバーン剣はハーナン族の戦斧のように重く感じられた。百回も女と交わったかのように、腰のあたりがだるかった。

どうやら、昼はとうに過ぎていた。人通りはそれほど多くはなかったが、それでもここは西部最大の都サンジェリイだ。雑多な人々がそれぞれの何かを抱いて行き交っている。

大きな葛を背負った商人が額に汗をにじませて歩いていく。走り使いの少年が、薄汚れた灰色の布袋をもって走り去る。白髪の老婆が、杖をついて、ゆっくり午後の散歩をしている。

だが、彼らは回り燈籠に描かれた人影のように、私の左右を通り過ぎていく。私はどこへ向かっているのだろうか。周囲の風景は歩いていくに従い、おぼろな影のようになっていく。ただ、薄灰色の雲に履かれた空だけが、くつきりと見える。雲のひだには、あざやかな青や赤の輪郭線が、版のずれた色刷り版画のように、見えている。

影絵のような景色の中を私は歩いていく。街行く人々の騒ぎがはるか遠いものになっていく。

私は廃墟に立っていた。

昨夜見た通りの、夢で見た通りの廃墟だった。白い石柱が何本かはまだ立っている。白い壁もまだ、幾らかは残り、そこには何かの象徴らしい浮き彫りが半ば崩れて残されている。

地面を瓦礫の山が埋めている。大小の石片、漆喰のかけら、ひび割れた敷石、雨ざらしになり朽ち果てた木製の長椅子。

その奥には祭壇とおぼしき低い台がある。人が横たわれるほどの大きさの滑らかに磨かれた石の台。

空のどこかで雷が鳴っている。低い雷鳴が聞こえる。灰色の空から、雨粒が落ちてくる。

祭壇の向こうに彼女が立っていた。肖像画で見た青紫の上品な着物を

まどつている。蒼白な肌、だが、唇と頬は上気したように赤い。鳶色の瞳が私を見ているように見える。長い黒髪が雨に濡れて光る。細い指には銀の指輪がはめられているが、そこにあるべき宝石はなかった。

私は彼女に歩み寄った。

「……イーヴァ……君か……」

「私よ。イーヴァ・ライヴェ・イアハルト……」

イーヴァはかすかな笑みを浮かべて、そう答えた。だが、彼女がその名を口にするとき、赤い唇は異なる音を発しているかに見えた。

「あなたの……恋人よ、ランケン」

近づくとその高価な絹の衣装は汚れ、あちこちが裂けているのがわかった。何日も湯につかっているかのような臭いがした。

イーヴァは青い服を脱ぎ捨てた。灰色の空に投げ上げられた服は、宙で溶けて、青インキのようになって飛び散った。

彼女は何も身につけていない。白いやせた胸に雨粒が当たってははじけて落ちる。

彼女は手に銀の刃を持っている。それを自分の髪に押し当て、ざっくりと切り落とす。黒髪はゆらゆらと妙にゆっくりと、なめらかな彼女の肌の上を滑り落ちていく。

もう一人のイーヴァがそこに出現する。瞳の色が薄くなっていき、琥珀色になる。視線は私の体と脳を縛り、世界の果てを見つめる。

弱い風が、彼女の香りを運んでくる。甘い蜜の匂い。少女にはそぐわない熟れ過ぎた果実のような匂い。

私は瓦礫を越えて、彼女のもとに行こうとする。祭壇の前に立つ。

夢で見た通りのごみのような供物がたくさん周囲に並んでいる。泥と汚穢にまみれているのは、裁判官の法衣だろうか。幾つにも裂かれて、無意味な文字の列をさらしているのは、『民人の法』か『王の法』か。ひびわれた髑髏にかぶせられているつばのない黒い帽子は、警邏隊長官のもので

はないのか。

イーヴァは満足げな笑みを浮かべて、右手を股間にやる。自ら秘められた裂け目を拡げると、そこには、あの石が鈍く光っている。それは白く粘ついた液体にまみれている。

夢で漏らした私の精液だ。

イーヴァは自らのそこを慰めるようにゆっくりと、それを拭った。彼女の白い指には、赤く血が混じったような樹液がついた。彼女はそれを丹念になめ取った。

石の色が変わっている。こびり付いた血を拭ったかのように、黒ずんだ赤からそれは深い紫色になっていた。石は光を増し、雷鳴と鼓動を合わせるように明滅している。

私たちは互いの体を抱きしめ、唇を重ねた。私は身に付けているものを引き剥ぐように取り去った。投げ捨てたファバーン剣の刀身には神秘文字が緑色に燃えていた。魔法が行われている。だが、暗闇の魔法ではない。甘く美しい、色とりどりの魔術だ。冷たい緑色の光は、今の私には意味はなかった。

祭壇の上で私と彼女は交わった。昨日の夢のように、腐った果実の布団の上で、腐敗した汁にまみれて、狂ったように腰を動かし、舌をからめあった。

恐ろしい快楽が私を支配した。逸物から、いや、彼女と触れ合っているすべての皮膚から、鉄をも溶かす熱い快感が生まれ、私の理性を粉々に打ち砕き、どろどろの欲望の粘液に変えた。二人の体を動かす律動は完全に一致し、肉と肉、肌と肌、体液と体液が、狂気の祝宴の楽の音を奏で続けている。

韻律が速まり、悶える声の旋律が高まる度に、私の中で、閉ざされていた記憶の封印が解けていく。包み隠していた魔法の絹布がじわじわと焼け落ち、中のもものがのぞいていく。かいだことのある香り、感じたことの

あるまなざし、見覚えのある瞳、触れたことのある肌……

私の体内に、快樂とは違う何かが沸き起こり、急激にそれは高まっていく。快感の大波に、その影のように何かがつきまとい、体の中を駆け巡る。閉ざされたものは、ほとんどその姿を現わしている。私には見える、それが何か。言葉だけが、未だ封印されている。

イーヴァはナクシャッツの熱病に冒されたかのように、痙攣するように腰を突き上げ、私の逸物をより深く、その胎内にくわえこもうとする。私もそれに応えて、彼女の肉の穴を突き破り、子宮の中にまで達せとばかりに、男根を突き入れる。沸き起こるもう一つの何かは情欲の中に埋没し、解かれ始めた記憶の幻は意味を失っていく。

私とイーヴァは同時に快樂の絶頂に達した。頭や手足から、血の気が引き、すべての知覚、感覚が麻痺していく中、性の快樂のみが化け物のように膨れ上がり、爆発した。射精の瞬間、すべての封印は解かれ、言葉が、私の冷たくなった脳に満ち、こだました。

大勢の声が聞こえる。悦びに満ちた声が、廃墟に響いている。その悦びの声は、百人もの人々が、同時に快樂の絶頂を迎えたかのようにだった。灰色の雨雲の裏側で稲妻が千本も走り、空は青白い光に包まれた。

今こそ、私はこの祭壇が、いかなる存在のためにあるかを理解した。私はその神の名を知っていた。一度は自らの手で、その復活を阻止した邪神、三千年の昔、シェラドゥーアの都に君臨し、墮落と退廃に満ち満ちた夢幻境をこの世に造りだした妖美の女神を私は今、呼び起こしたのだ。

その神の名はヨウラという。
三千年前、『光る神々』との争いに破れて、何処の宇宙へか追放されていた魔性の女神を私はよみがえらせたのだ。

イーヴァの股間で脈打つ石は、神々の復活を担う力を秘めた石、私が廃塔から海に投げ捨てたはずの魔石『ハルロツツの瞳』に違いなかった。廃墟にはたたくさんの人影があった。白っぽい長衣を身につけた数人の

男女は、猥雑さと荘厳さが入り交じった異国風の節回りでヨウラを賛える歌を歌っている。歌いながら、彼らは法衣の裾を捲り上げ、男は屹立した男根を巫女たちにくわえさせ、女は、少年達に女陰をなめさせている。神官の一人の顔はウィールドに良く似ているような気がする。

様々な身なり、年齢の人々が口々に神の名を賛える。

「ヨウラ、コーラ、アフティ、エバス……」

アニヤチの言葉、イオロップの言葉、エスカールの言葉、ナクシャッツの言葉、ブーマ・グージアの言葉も聞こえる。ナクシャッツ語で叫びながら、子供の尻を犯しているのは、あの肖像画家のようだ。

誰かの声はこう聞こえる。

「ジョウル・ラー、ジョウル・ラー……」

そう呪文のようにつぶやきながら、髪の毛の長い瘦せた少女を犯している老人は、イアハルト伯爵に良く似ている。青ざめた少女は、まだ乳房もほとんどふくらんではない。

私は、身を起こし、まだ交わったままの女の顔を見る。

「至福の時が来たのよ」

ほほえむ彼女の顔は心持ち肉付きがよくなり、唇がより肉感的になったような気がする。髪の毛の短いイーヴァは誰かに似ている。もう一つの幻から霧が払われ、あやかしの姿が明らかにになる。

かつて『ハルロツツの瞳』をジクロイスの寺院から取り戻してくれと私のもとを訪れた女がいた。その女も琥珀の瞳の持ち主だった。イム・モエヤと名乗ったその女は、ヨウラのこの世の化身、ヨウラの復活を計る蛇淫の女だった。帰って来たわとささやいたのは凶々しい石に閉じ込められた彼女の思念だったのだろうか。

壁の半ば崩れた印を見る。横線が中央より上についた十字形、交わった点には、星。この廃墟はトリプロ街のジクロイス寺院だ。『ハルロツツの瞳』が隠されていたところ、あそこに転がっている頭の砕けた聖像、あそ

こに神を復活させる石は隠されていたのだ。

記憶が次々と継ぎ合わされ、形をなしていく。それは黒紫色の煽情的な衣装をまとったモエヤ夫人の爛れた彫像になっていく。

八年前のある日、モエヤ夫人は『ハルロツツの瞳』を取り戻して欲しいと現われた。ワコフに、それは神々の復活に関わる魔法の石だと忠告された私は石を渡すまいとした。ヨウラの復活を阻止しようとするジクロイス教徒、自らの人食いの邪神をよみがえらせようとするセベ・チャグルの神官も入り乱れた闘いは、太古の魔術によってそびえたつ廢塔の頂きにもつれ込んだ。モエヤ夫人の幻術にかかり、ジクロイス教徒とセベ・チャグルの神官たちは、色情の虜になって悶え狂う。

星々の位置がそろい、復活の時が来る。私はファバーン剣の力を借り、モエヤ夫人を斬った。赤光の中に妖女は消え、私は石を海に投げ捨てたのだ。

記憶の封印は解かれたが、それは私に何ももたらしはしなかった。ただ、そういう過去があつたというだけだ。

まわりの人々は、口々に邪神を賛えながら、手当り次第に交わりを始めている。廢墟は、男と女、男と男、女と女の上げる淫らな音で満たされる。

私は祭壇から降り、まわりを見渡した。

「あなたの世界よ」

イーヴァが私に体を押しつけ、耳たぶを噛みながらささやく。

惚けたように目を見開き、繰り広げられる肉の宴を見続ける。見覚えのある顔が幾つもある。全裸の金髪の女の足元に膝まつき、足の指をしゃぶっている小男は、ヨウラの力を借りて、完全な美の化身を造っていたキュソアという名の人形師ではないのか。一団の鉛色の顔をした、半ば腐った体を持つ男たちは、『ハルロツツの瞳』を付け狙っていたセベ・チャグルの神官たちではないのか。何匹もの蛇のようにからみあって、互いの性器と肛門を責めあっている血まみれの男女の群れは、この寺院で石を守

護していたジクロイス教徒たちではないのか。黒髪をゆらし、男に馬乗りになって喜悦の声を上げている豊富な肉体の女にも見覚えがある。ロラストの山の向こうで沼に棲む魔物と結び、美しさを手に入れたあの女ではないのか。笑い声とすすり鳴きを交互に漏らしながら激しく瓦礫の中で交わり続ける中年の男と、細みの女は、ギルーベのはらわた男爵とその双成の子ではないのか。

あの石柱の影で、大きな乳房を揺らして、三人の男と同時に交わっているのは、ミューツィーではないのか。

私の人生は、今、この時のために、用意されてきたものだろうか。すべてはこの時に収束するのか。数知れない不毛な闘いは、この時のためにあつたのだろうか。

生暖かい雨が降っている。雨は精液のように粘つき、淫水のような香りがする。灰色の空には淡い虹色の光が、狂ったように、犯しあう人々の腰の律動に合わせて、舞を舞う。見慣れたサンジェリイの家並みが蜃気楼のように揺らいで見える。王宮のオフの塔、シュヌベル大学の時計塔、プルクト神殿の尖塔、そして、遠くルクセン岬の廢塔が、見えない手で引き伸ばされて、空に延びていく。エスカールの極北の地で見られる極光のように、緑や紫、桃色の光の布が、灰色の曇り空に出現する。町並みをすっぽり覆うようにもう一つの街が現われる。白い丸屋根と尖塔が幾つも連なる美しい都。その街を見たことはなかったが、私には街の名がわかる。シエラドゥーアが、邪美神ヨウラの街が三千年の時の彼方からよみがえろうとしているのだ。

見る見るうちにシエラドゥーアの幻は、サンジェリイのくすんだ建物を覆い隠す。白い家々には宝石のように様々な色合いがちりばめられ、どの家も流れるような官能的な曲線で形作られている。シエラドゥーアは街自体が一つの芸術作品なのだ。理性によらない様々な感覚を集合させた、巨大な生命の建築。

気づくと私がいるところも、もう廢墟ではなかった。白い大理石で造られた宮殿に、私はいた。いかなる匠の技なのか、鉛のように不規則にねじ曲がった柱が、これも不規則な凹凸をもった半球状の屋根を支えている。黄金の鉢が黄金の鎖で吊され、濃密な匂いの香がたかれている。壁は、考えられる限りのあらゆる姿態で、淫らな行為を続ける男女が、恐ろしく歪んだ煽情的な姿で彫り込まれている。

広間の一面は露台となっており、狂気じみた、しかし美しい家並みが広がっているのが見える。塔は男根、丸屋根は女陰だ。灰色の雨雲が地平近くで跡切れ、沈もうとする夕陽がのぞく。夕陽は、信じられないほど赤く、白い町並みを紅に染める。

「殿、陽が沈みまする」

細い指が私の胸を後ろから抱きすくめる。

「イーヴァ……」

髪の短い少女が立っている。ほっそりした体を絹の薄物一枚に包み、私にもたれかかる。額には黄金の頭環、開き切った女陰を型取ったその飾りには紫色の石が光る。

私はイーヴァを見つめる。彼女の金色の瞳はしっかりと私を見つめている。深く限らない純真さがその瞳にはあった。珊瑚色の唇からは、これから夜通し行われるであろう快樂の行為への期待が隠し切れずに、見えない唾液となってあふれ出る。その唾液は澄んで美しく、混じり気のない蜜のように甘く、かぐわしい。

「寢殿へまいりましょうか。それとも、ここで……」

「ここでいいじゃないか」

私たちは、互いの服を脱がし、くちづけをし、体をまさぐり、交わった。私の逸物は幾度精を漏らしても、萎えることはなく、イーヴァの秘裂は果てしなく蜜を溢れさせ、私の樹液を吸い込んだ。夜は明けることがないよう、晴れ上がった夜空では、星々が幾度も幾度も昇り、沈んでいった。

街からは灯が消えることなく、騒音が湿った風に乗って聞こえてくる。無数の人々が、それぞれのやり方で、肉の悦びに浸り、魂を解き放っている。歓喜の音が、いつまでもいつまでも聞こえてきた。

私たちの悅樂には終りがなく、大理石の床は私とイーヴァの流した様々な体液で濡れ、冷たい石までが欲情しているようだった。

短い行為の合間にイーヴァは床に転がっていた林檎を取り、嚙った。林檎は黒ずみ、腐りかけていたが、甘い良い香りがした。イーヴァは口移しで私に林檎を与えた。腐った果実は甘かった。

「すばらしい世界が訪れたのよ」

彼女はうわごとのようにつぶやいた。私はあいまにうなずき、彼女の口の端についた果汁をなめ取った。

「街の声を聞いて。誰もくだらない倫理や道徳、常識というものに縛られる者はいないのよ。誰もが、魂と肉体の自由を得たのよ。永遠の美と快樂の世界が始まったの。人々は愛を交わすわ、なにもにも束縛されない愛よ。純粹な美が生まれるわ。芸術家の心を縛っていた伝統も、見えない枷も消えるの、本当に自分の欲するものだけを造ることが出来る。理性という枷はないのよ。ヨウラがそれをもたらしたのよ。ヨウラは邪神ではない、ヨウラは解放の神よ」

私はうなずき、もう一度、彼女にくちづけた。

私は幸福を感じた。安堵感があった。私はずっと、何かを求めて旅をしていた。得体の知れない何かを求めて世界を放浪し、サンジェリイに帰っても、まだその何かを求めて、街をさまよい続けていた。その間、私は数え切れないほど、剣を振り、おぞましい異界のものを滅ぼしてきたが、一度としてその闘いを望んだわけではなく、勝利はいつも空しく意義のないことだった。

人々は身近なところに彼らなりの何かを見だし、それぞれの幸福をつかんでいたが、私には何かを見いだすことがとても難しかった。

その何かを私はついに見いだしたような気がした。イーヴァとの阿片の夢のような交わりの中に、私の安逸は約束され、魂は解放された。

いつの間にか、夜は明け、水色の空に金色の陽が昇った。だが、街からの声は変わることなく、跡切れはしなかった。終わり無き宴は陽光によってかき消されることはないのだった。

昼夜の時間は女神の気まぐれで決定されているようで、日ごとに違っているようだ。陽は沈み、陽は昇り、狂った機械時計のように宇宙は時間を刻み続けたが、誰もそれに気を止める者はなかった。

私たちは互いの唇を、舌を、股間を、胸を、尻を、足を、腕を、指を、肌を、髪を、味わい尽くし、貧りあった。

侵入者は明け方に訪れた。私とイーヴァは体をつなげたまま、浅い眠りに落ちていた。私は足音で目を覚ました。瓦礫を踏むような不規則な足音だ。広間に広げた羽蒲団の上で私は見を起こした。濡れた音がして逸物がイーヴァから抜け出た。イーヴァも目を覚ました。

広間には、デリン燈を硝子細工の籠に収めた明かりがある。手を触れると、薄緑の光が部屋を照らした。

侵入者は枯れ葉色の長衣に見を包んだ瘦せた人影だった。その姿は、絶えず細かく震え、揺れているので、はつきりと顔形を見ることが出来ない。亡霊のような影は右手に光る剣を持っていた。刀身が青緑に輝く反り身の長剣だ。

影は、奇怪な足音を響かせて近づいてくる。くぐもった声で何事かつぶやく。聞き取れない呪文のようなつぶやきと、一歩ごとに石を崩すかのような音が広間にこだまし、私は総毛立つような恐怖を覚える。

「ランケン、あれは……」

イーヴァが私の肩に手をかけ、しがみつくと、だが、私には彼女を守って

やれる自信がなかった。私はその存在が怖かった。薄茶色の亡霊からは、腐敗臭が漂う。頭巾をかぶった白い顔は、水に映る影のように揺れ続けているが、髑髏のように見える瞬間もあった。

「ラ……ン……ケン……」

世界の果てから響いてくるような声が、私の名を呼ぶ。恐怖のあまり、冷たい汗が吹き出てくる。

私は壁にかけてあった、銀の短剣を握った。宝石で飾られているが、長さ二メートル近い、刃を持った武器だ。

亡霊の剣から放たれる光に照らされると、宮殿は変質する。大理石は崩れ、織物は朽ちた。恐ろしい時の経過が、その光によってもたらされるのだろうか。

「ランケ……ン……」

影の呼ぶ名が、私の脳髓から爪先までを嵐のようにかき乱す。

「だめよ、ランケン、答えてはだめ、連れていかれるわ」

イーヴァが震える声で言う。

「…ランケン」

光る剣が振り上げられた。切っ先が、祭壇を打つ。石にひびが入り、それは数世紀の時を一気に経たようになってしまう。剣はこぼれる様子もなく青緑の光を放ち続ける。

私は短剣を亡霊に突き入れた。亡霊は緑の剣で私の刃を受け止める。白い骨のような手がぼうつと光っている。私たちは剣を組んだまま、押し合った。腕に力が入らない。亡霊はまた、私の名をささやく。

「ランケン…ランケン……」

声はだんだんとはっきりしたものになっていく。頭のどこかで、亡霊の声が、現し世のものと重なり合う。

「ランケン、だめよ、それを滅ぼして！」

イーヴァが叫ぶ。その時、揺らぐ亡霊の顔が、一瞬、はっきり見えた。

全身が凍りついたようになり、私は短剣を取り落とした。亡霊は緑の剣の柄頭で、私の頭を打ち、私は床に崩おれた。影が剣を振り下ろすのを、私は床の上から見た。

緑色の光る刀身が、イーヴァの額を打った。恐ろしい叫びが上がったが、イーヴァの頭蓋は割れはしなかった。額に巻いた金の環だけが二つになり、中心の宝石は粉々に砕け散った。

紫の炎が燃えあがり、剣の緑の光と激しくぶつかりあった。亡霊が、耳慣れない呪文のような言葉を叫ぶ。紫の炎は怒りをはらんで膨れ上がり、剣を包みこむ。

「リユーフェン、イヒト、ヴィー！」

亡霊が、金切り声で叫んだ。

亡霊の剣から、目も眩む巨大な稲妻が走り、紫の炎をかき消した。炎は塵のように、うっすらと広間を漂い、一瞬、私の方へ集まってくるように見えた。だが、次の稲妻が、それを撃ち、炎は消えた。

私の目の奥には、金色の瞳の女の幻像が残った。彼女は赤い唇を動かし、最後の秘め事をささやいた。聞き取ろうとするうちに彼女は消えた。

イーヴァは糸の切れた操り人形のように、私の上に倒れた。私は萎えた両腕で、その冷たい体を抱きしめた。イーヴァはとても軽かった。

雨が降っていた。細い雨糸が私とイーヴァの体を瓦礫とごみの中に縫い付けるように灰色の空から落ちてくる。

宮殿もシエラドゥーアもどこにもなかった。私たちはジクロイス寺院の廃墟に重なって倒れていた。いろいろなものが腐り、朽ちていた。肉、魚、野菜、果実……供物があちこちに散らばり、腐敗臭を放っていた。汚物の臭いもする。私とイーヴァの体にも、汚れたものがこびり付き、臭いを放っていた。

少し離れた倒れた石柱に、枯れ葉色の服をまとい手に剣を持った者が

座っていた。長い黒髪と白い顔は墨で描かれたアニヤチの蒔絵のようだった。

「街から、異様な気が立ち昇っていたの。占いの水盤は割れたわ。人も街も透き通る幻と実体がゆらゆらと重なって、蜃気楼の中みたいだった。あなたの声が聞こえるような気がして、歩いていると、ここに辿り着いたわ。ファバーン剣が今まで見たことがないほど輝いていたわ。あなたはそこで、その女と……」

『ハルロツツの瞳』は破壊したわ。ファバーン剣が活性化したの。三千年前にシエラドゥーアを滅ぼしたのも、この剣の持ち主かも知れないわね」
私は何も言えずに、アムアッサを見ていた。彼女の美しい顔はいつにもまして白く、白墨で塗られたようだった。

「そんな目で見ないで。おもちゃを取り上げられた子供みたいよ」

占い師はぎこちなく笑い、剣を置くと立ち上がった。瓦礫の中を疲れた足取りで、歩み去った。

「…ランケン」

イーヴァが寝言のようにささやいた。長い髪が彼女の肩から落ちて、私の顔を覆った。私は彼女を抱き起こし、乾いた唇にくちつけた。

イアハルト伯爵は、ほとんど言葉らしいものはしゃべれなかった。一月前に卒中を患い、それ以来、一人では何も出来ない身になったと、ウィールドは言った。ウィールドは私の顔を覚えてはいなかった。彼は愚直なまでに主人に忠実なただの執事だった。

「お嬢様は、このお屋敷の暮らしが嫌になって、家を出てしまわれたのです。ヤズリーという家庭教師が家に出入りしていたのですが、こいつが、家柄とは大違いの放蕩者でして……世間知らずのお嬢様は甘言に乗せられてしまったのです。ご主人様は大層心を痛められました……屋敷に縛りつけていた私が悪かったと……」

私は偶然、夜の街をさまよっていたイーヴァを見つけたと、嘘をついた。ウィールドは礼だと言って、百ダズンをくれた。

イーヴァの記憶はすべてがおぼろな霧に包まれているようだった。もやもやとした幻に悩まされる様子もあったが、多くのことは、記憶の奥底に閉じ込められているようだった。

「不思議ですわ、ランケン様。あなたを良く知っている気もするし……でも、お会いしたことはない……」

赤い、イオロプ風の洒落た服を着たイーヴァは歳相応に見え、愛らしかったが、幻影の宮殿で肌を重ねた彼女とは別の女だった。肖像画の中の彼女より、少しばかり唇に赤みがさし、艶っぽく見えた。

彼女は胸元に揺れる髪をうるさそうに、肩越しに背中へやった。

「お父様もご病気で大変でしょうが……はやく良い花婿を見つけられることを祈っていますよ。それと……」

「何ですの、ランケン様。あなたは恩人ですから、何でもおっしゃって下さい」

私は、外套を取り、帽子をかぶった。

「その長い髪はとても美しい。よく似合っている」

イーヴァは頬を染めて、無邪気な笑いを浮かべた。私はイアハルト邸を後にした。

「雨の夜、イーヴァを拾ったときから、呪術にはまっていたわけか」

「そうかも知れないわ」

アムアツサはマシユウ茶をいれた。今日はいつもより香りが強い葉らしく、薄荷のような匂いが立ち昇った。

『『ハルロツツの瞳』にはモエヤ夫人の意識がこびり付いていたのね、きっと。石が赤く染まっていたのは彼女の血、彼女の思念がこの世に形をとったものだったんだと思うわ』

「その思念が、ヨウラの復活を企んだ」

「そうね。でも、それだけではないわ。すでに滅んだモエヤ夫人の魂のかけらだけでは、こんな大きな魔術は行えない。ヤズリーという好色な男、そしてイーヴァね」

アムアツサは窓の外の青い空を眺めた。硝子細工のように繊細な横顔はあえて無表情をよそおっているようだった。

「イアハルト家の祖先には魔道士がいたらしい。彼女もその血を引いて、異界のものと共鳴する何らかの力を持っていたということだろうか」

「そう、それが、モエヤ夫人の思念に強く応えてしまったのね。イーヴァはあの屋敷に閉じ込められたような生活で、心の内に芽生えてきた色々なものが抑圧されていた。彼女はきつと恋をしたかったのよ。激しい恋をね。でも、それは厳しい父親や、弱い体のせいで許されなかった。朽ち果てようとしている屋敷の中で、彼女の活き活きとした生への羨望は煮詰められ、膨らんでいったのでしょね。そして、魔石とヤズリーという引鉄が、彼女の精神の内奥に潜んでいた力を解き放ったのね」

私はうなずき、マシユウ茶を飲んだ。苦味を帯びた味がする。

「沼に行きましょう」

アムアツサは、足早に、金色の螺旋階段を降り、外へ出た。私は後を追った。

彼女は、着ていた灰色の長衣を脱ぎ捨てると、丸い鏡のような沼に飛び込んだ。

「あなたも来て」

私は服を脱ぎ、沼に入った。幾度も彼女のもとを訪れていたが、この沼に入るのは初めてだった。水は冷たく、身を切るようだったが、なぜか、心地好い温もりもまた感じられた。普通の水よりも、この沼の水は濃い、そんな感じがした。

アムアツサは沼の真ん中まで泳いでいき、私を呼んでいた。私が側に行

くと、彼女はか細い腕を私の首に回した。瞳に陽の光が入り、紫の宝石のように見えた。

「あなた、まだあの女のおいがするわ。ここできれいにして」

「アムアッサ……」

「あなたが、望んだから、ヨウラは復活しそうになったのよ。石やイーヴァの力だけじゃない。あなたがヨウラの世界を望んだからよ。モエヤ夫人の思念はヨウラの復活よりもあなたとの交わりに向けられていたのかも知れないわ」

彼女は私の腕を取り、水底へと引き入れた。沼は信じられないほど深く、水は澄んでいたが、底は見えなかった。息は苦しく、私は手足をばたつかせてもがいた。水は私の中へ入り込み、何かを洗い清めてくれたような気がした。

岸辺に泳ぎついた私たちは、身を横たえ、弱々しい秋の日差しが体を乾かしてくれるのをじっと待った。

扉を叩く音がした。陽はとつぷりと暮れ、窓からは冷たい夜風が吹き込んでくる。私は、空の酒杯を寝台の横の小卓に置いた。ひどく疲れていたが、眠気はなく、デイコンを飲もうか、飲むまいかも決めかねて、ただ、寝床に座っていたところだった。

また、扉を叩く音がした。ぎいと蝶番がきしむ。鍵をまだかけていなかったのだ。

隣の部屋を静かに歩き回る足音が聞こえる。足音は近づき、私のいる部屋の前で止った。

「誰だ」

客人は答えない。私はファバーン剣をつかんだ。魔界の力を示すしびれるような感覚は伝わっては来ない。しかし、活性化して、強大な力を放った後なので、剣はあまりあてにはならなかった。

私は部屋を区切っている、掛幕を払った。

イーヴァが立っていた。白い夜着を着て両手を胸の前で組み、不安げな顔で彼女は立っていた。

「ご、ごめんなさい……自分でもよくわからないの。どうしてか、あなたに会いたくて……家も知らないはずなのに、いつの間にか、ここに……」
私は彼女の胸元で光る金の首飾りに目をやった。紫色の宝石がはめ込まれている。

私は切っ先をその石に突き付けた。イーヴァは息をつめ、鳶色の瞳からは涙が溢れた。ファバーン文字はくすんだままで剣はなんの反応も示さなかった。石を手にとってみたが、それは安物のメクス石だった。

「すまない。気になることがあったんだ。こんな時間に何をしているんだ」

イーヴァは無言で立ち尽くしていた。青ざめた唇が震え、雨の中に倒れていた彼女の姿と重なる。廃墟での果てしない情事の間がよみがえりそうになる。

「はやく帰りたいまえ、屋敷では心配している。辻馬車をまだ拾えるだろう。そこまで送ろう」

「ランケン様……私……あなたを愛していますわ」

彼女はあまりにも唐突な自分の台詞に、半ば驚いたように口に手をあてた。

「私……」

「君はヤズリーに良くない薬を飲まされていたんだ。だから、しばらくは妙な幻を見る」

「違うと思いますわ。イーヴァはあなたを……」

彼女はうつ向き、自分の胸を抱きしめた。それから、嗚咽を漏らして、私に抱きついてきた。

「私……私を抱いて下さい」

私は彼女の腕をふり払い、肩を乱暴に揺さぶった。

「馬鹿なことを言うな。子供に煩わされるのはごめんなんだ。僕は寝る、一人でね。君は帰るんだ」

私はすすり泣くイーヴァを引きずるように連れ出し、通りかかった馬車に押し込んだ。馭者はげげんな顔をしたが、銀貨一枚で口をつぐんだ。

私は誰もいない探偵局に戻った。古びた机に足を投げ出し、引き出しからデイコンの瓶と硝子の盃を取り出した。『古鴉』はまだ、封を切ったばかりだった。

私は自分と自分以外のすべてのものを呪いながら、酒杯を傾けた。瓶が空になるのはあつという間のことだった。

外に出て、デリン燈の緑の明かりに照らされた通りを当て所なく歩いた。

また、雨が降り出した。霧雨は、夜風に乗って穏やかな、しかし見る者を嘲るような舞を演じた。

酔った足はもつれ、私は道端のごみの中に転んだ。通り行く人々は眉をひそめ、視線をそらした。

目の前に腐った林檎が転がっていたが、銀の服を着た髪の短い少女はどこにもいなかった。